
魔法世界の

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の

【Nコード】

N1305X

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

二人の高校生は気付くとファンタジー世界にいた。謎の世界から脱出するため、西を目指す！

ここはどこなんだろうと蓮池英は考えた。答えなんて出ないが、とにかく自分たちが先ほど前まで英の部屋にいたという記憶は確かだ。傍らには友人である奥村睦雄りくおがいて、同じく途方にくれていた。今いるのは山深そうな森の中だった。辺りは鬱蒼うっそうとしていて、鳥の鳴き声が聞こえる。すでに夕方から夜になりかわろうとしており、薄暗かった。

「ここはどこなんだろう」睦雄は途方に暮れた声を出した。

「わからない」英にはわからなかった。さっぱり。何もかも。

電子音がした。

よく見ると、英人睦雄は二人とも黒色の、何かの携帯端末を手に持っていて、電子音はそれが起動した音らしく、六インチほどのディスプレイ画面が光っていた。

画面を見ると、そこには『ようこそ、エルタニアン大陸へ』と大きく書かれている。『プリーズタッチ』と英語で書いてある。

タッチパネルなのだ英は理解し、画面を指で触ってみた。暢気な音がして画面が切り替わった。

貴方の名前は蓮池英。年齢は十八の男性です。まず最初に貴方の職業を選択してください。職業は全部で十二種類ありますが、なれる職業は貴方に合ったものだけです。貴方がなれる職業は以下の通りです。どれか選択してください。

剣士 剣の扱いに長け、素早いですが戦士よりも力はなく、装備できる物も戦士より少ないです。

盗賊 ナイフと窃盗を得意とする職業です。扉や宝箱の鍵開けに重宝します。素早さは最高クラスですが戦闘能力は中途半端

で、装備品も限定されます。

無能力者 戦闘能力は一般人ですが、運が高いです。特徴はそれだけです。

タッチパネルなのだ。おそらく職業名に触れればそれが選択と決定となるのだろう。迷わず剣士にしようかと思ったが、英は間違えて軽く触れてしまった無能力者を選択してしまった。

「あ」

『無能力者ですね。貴方は無能力をもってこの世界を旅していくのです。それでは、旅の始まりです。ファイト!』

「……睦雄はどの職業にした？」低い声で、英は聞いた。

「俺はソルジャー」

「何それ。そんなのなかったぞ」

「なんか槍使いで最初から戦闘能力が高いんだって。魔法使いとか選べないのかな。英は？」

「無能力者だって」

「お前ってチャレンジャーなんだな」

「間違えたんだよ。念押しは常識だろクソ……ところで俺達はいったいどこで、何をしてるんだらうか」

二人は再び周囲を見回し、途方に暮れた。一体ここはどこなんだろう。エルタニアン大陸ってどこなんだろう。そしてもしここがその大陸だとしたらここはその大陸のどの辺りなのだろう。そしてどうしてこんなところにきてしまったのだろう。

英はディスプレイを見た。画面は地図表示になっていて、今自分たちがいる場所だと思われる所が赤く点滅している。

この森の名前はエボンの森というようだ。試しに、名前の場所をクリックしてみる。

エボンの森。ゲンシャ山の周囲を囲む広大な森。夜になると大狼が出没する。

ちよつと危険な香りがする。英は逡巡し、地図を見ながら森を越えたほうがいいなと判断した。地図表記が正しいのなら、現在地の近くに村があるようなので、とにかくそこまで行くことにしよう。なにやら聞きたくないものが聞こえてきたような気がした。

「遠吠えが聞こえるぞ」ぼんやりと睦雄が言う。

「やばいつてことだよ。走るぞ」

なんせ武器も何も持っていない。狼なんかに襲われたらひとまりもないはずだ。大狼という名前も気になるし……。

二人は走り、やがて民家がある場所についた。村のようだが、勿論二人には何の村なのかわからない。英は冷静に、ディスプレイを覗いて地図を見た。地図にはカンソ村とある。村人は親切で、困っているとは飯と宿を提供してくれるという。

「なんだかよさげな場所だな」

睦雄も英と同じくディスプレイ画面を覗いている。

「なあ、今日はここのお世話になるう」英が提案する。

「意義ないし。だけど状況はさっぱりだな」

比較的裕福そうな家を探すが、どれも藁葺き屋根の貧しい家ばかりだった。家は点在しているが、家から家までの距離もかなりあり、二人はくたびれてきた。やがて、一際大きくレンガ造りの、他とは一線を画す家が見つかった。

「なんだか現代的な家だぜ」睦雄が嬉しそうに言う。

英は明らかに場違いだろと思いつつも玄関まで行き、扉をノックした。やがて白い衣装の中世ヨーロッパを彷彿とさせる衣装を着た老婆が現れた。

「なんと面妖な」

老婆は二人を見て訝しい顔をする。

「どうした？」

背後から灰色の肌着を付けた老爺が姿を見せる。「なんとな、妖魔の類か」

「妖魔じゃないです。僕たち今晚泊まる所がないんです。ここで泊めてもらうことはできませんかね？」

「妖魔にしては人間のような口をきく。婆さん、今夜は妖魔汁にしよう。弓を持って参れ」

老婆が家の奥に行こうとしたので、英と睦雄は全速力でその場から逃げ去った。

「どこが親切な村人だよ！」

荒い息をついて睦雄が言った。

「知らないよ。たまたま嫌な家に当たったんじゃないのか」

「情報は鵜呑みにしないほうがいいってことか……早速勉強になった」

英は周囲を見回す。夢中で走ったが、ここはまた森の中だ。まずいのではないだろうか。

狼の咆哮が聞こえる。かなり近い。

村へ戻ろうと英が言おうとしたとき、そこに一人の男が現れた。

男は赤い立派な鎧に身を包み、実に逞しい体軀をしている。その顔は凜々しく、そして恐ろしくもあった。年は二十代半ばほどだろう。

「きたか……初心者たち。二週目の俺が助力を与えよう」

男は英に何かを放り投げた。英はそれを受け取った。それは見たところ護符のように思えた。

「これは……」

「それを“使う”んだ。やり方はわかるか？」

英は首を振る。

「護符を握りしめて念じる。そうすればそれは結界となり、周囲数メートルの魔物を寄せ付けなくなる。……狼が近付いている。俺も忙しい身だ。ここに長居はできない。それを使えば一晩は狼たちに襲われることはない」

男はさらに何かを放り投げた。それは睦雄が受け取った。

「それは携帯食料だ。三日分はある。高価なものだから、けちって使え。食料は有限じゃないからな。それじゃあ、幸運を祈る」

男はそう言くと狼を警戒してか、素早く走り去っていった。

「何だあの野郎は」睦雄が言う。

「わからないけど俺の直感では……いや、やめとく。ただの善い人だろ」

「二週目ってなんだよ——なあ、早くその結界ってやつを使えよ。そろそろやばそうだぜ」

周囲を狼に囲まれているということに遅く、英は気付く。英は慌てて護符を握りしめ、念じた。何を念じればいいのかわからないが、この護符が結界として機能するように、念じてみた。効果はあった。急に風を感じなくなり、なんだか見えない壁に守られているような安心感が生まれた。

少し前には狼たちが、暗き木々の間から姿を現した。大きい。動物園でみた狼よりも一回り大きく、ハイエナほどの大きさだろうか。鼻面を地面にこすりつけて何かを探っている。おそらくこちらの匂いを探っているのだろうが、どうやら狼たちは英達を見つけられないようだった。

「すっげえのな」睦雄が呟く。

耳のいい狼なら睦雄の呟きも聞こえるはずだ。しかし、全く反応しない。声すらも遮断するようだ。

これはいい代物だ。しかし……英は思う。あの男が助けてくれなかったら、自分たちは今頃どうなっていたのだろう。

睦雄が木の幹に体を預け、そのまま倒れる。先ほど貰った携帯食料の半分を英に渡すと睦雄は携帯食料を食べ始めた。小さな箱に入っているそれは固形の、丸い形をしている。少しだけかじったのだ。「甘いし、腹持ちがいい。スニッカーズよりもいい」睦雄は嬉しそうだ。

「けちって食べないとな」

「だな。もういいよ」

腹も満ち足りる。水はないが我慢できた。少し落ち着くと、様々な疑問が生まれてくる。

「なあ英、ここってゲームの中の世界って解釈でいいんだよね？」

「俺にはわからないけど、そう考えるのが妥当なんじゃない」

英は狼に囲まれながらも、安全だとわかるとその場に横になった。草むらに横になるのはあまり好きではない。虫もいる。しかし今は

仕方ない。このまま立っていても疲れるだけだ。

ディスプレイを覗く。色々調べて見る。大まかな自分たちの目的でもわかればいいのだが。ここがゲームの世界なら、そういう旅の目的があってもいいはずだ。しかしそういった内容は書かれていない。もしかすると、旅をして、徐々に目的が見えてくるのかもしれない。

一応、世界の様子や国々の情勢などが書かれてあるが馬鹿みたいに複雑で英は途中まで読んでよくわからなくなった。眼鏡を取って目をマッサージする。

——とにかく、ここはエルタニアン大陸。地図を見る限りではここは大陸の南東のカッシーニと呼ばれる小国。ここから北北西に行くと大きな城下町があるようだ。とりあえずそこまで行ってみようか。

だけど……英は思う。自分達は一体全体、何故こんな世界に迷い込んでしまったのだろう。気付いたらここにいたのだが、ここに来てしまうきっかけとなった記憶がない。睦雄は自分の親友だ。睦雄と一緒にのはしょっちゅうなのだが、彼と一緒にどんなアクションをしてこんなところに？

英は考えるのをやめた。睦雄を見ると睦雄もディスプレイをいじっている。

大して眠くはないが、他に特にすることはない。英は目を閉じた。

起きると朝になっていて、狼の姿は見えなかった。

二人とも大して会話もしないまま、行動を移すしかないという強迫観念に突き動かされるように地図に従い歩き出した。

カップリア街道を二人は進んでいる。何故その道を進んでいるかというと、その道が当面の目標であるミサンガ城下町に続いているからだ。街道には魔物が出るらしいがレベル一の冒険者でも勝てるような敵ばかりだと電子端末で英は確認していた。

これが明らかにいわゆるテレビゲーム、その中でもロールプレイングゲームというジャンルのゲームをゲーム画面ではなく、実際にあるような世界で行っているということを英はわかりつつあった。ドラゴンクエストのようなゲームを現実——実際にはファンタジー世界である非現実なのだが、テレビ画面ではないリアルティ世界でのゲーム体験。そしてその筋の小説や漫画腐るほどあることも英は知っている。

おそらく睦雄もそれを理解しているのだろう。だから二人ともお互いに大した質問もせずにファンタジー世界を練り歩いている。

レベルの概念があることはわかった。そして自分たちのレベルもわかった。プロフィール画面でそれがわかる。年齢は十八。性別は男。職業、無能力者。レベル一。そして様々なスキルが網羅されている。ちなみに英のスキルは数ある中でどれもが一で、幸運のスキルだけが三だった。

「睦雄のスキルは？」

「俺は槍のスキルが三、防衛術が二、あと剣とか弓とか武器関係が二、そんな感じ」

それを聞いて英は自分が実に弱々しい設定で歩いているのではないかと不安と不満を感じ、睦雄に対し羨望のような、嫉妬のような

憎悪のような感情を孕んだ眼差しで睨みつけた。

「なんだよ。大丈夫だって。魔物なんてでないと思うし」

英はそんなことは思わない。というよりもこの世界を見てそういう発想を持つ睦雄が信じられない。

「睦雄は楽観的というか想像力が欠如している。それじゃこの世界で暮らせないね」

「構わない。俺現実主義だから」

道の真ん中にキャンプがあるので二人は歩みを止め、訝しく思い、互いに顔を見合わせ、それからキャンプの入り口をめくってみた。

「いらつしゃい」

明らかに日本人ではない、褐色肌の老人が胡座を掻いていた。「何か買ってくださいよ」

剣に弓、それに斧。小さな盾もある。値段も描かれてある。不思議なことにそれはカタカタで、斧は三十二エダと書かれてある。

電子端末が音を鳴らした。英は画面を確認した。そこにはこの世界のお金についてというタイトルで文章が書かれてあった。英はそれを読み、理解する。エダとはこの世界共通の単価のようだ。初めてこの世界にきた者には百エダが予め支給されているようだ。それはすでにプレイヤーが持っているようだ。

英はどこにあるのかとポケットを探った。なかには何もない。しかしジーンズに見慣れぬ革袋が紐で括り付けてあるのを発見した。今の今まで気付かなかった。革袋を取って中を見る。銅のコインに数字が書かれている。一と書かれたコインが五枚。五と書かれたコインが一枚。十と書かれたコインが四枚。五十と書かれたコインが一枚入っている。なるほど、これで百エダかと英は納得する。

「武器くらいは買っておいたほうがいいよな」

睦雄は手頃そうな槍を手に取り、そして適当に選んだ剣を英に渡した。槍と剣は併せて八十六エダだった。残金は十四エダになり、英はそれを革袋に入れた。紐で再び括り付けるのは面倒なのでポケットに入れる。

二人は剣を手にし、再出発する。

歩くこと五分、目の前に大きな芋虫のような物体を発見した。その芋虫は中型の犬ほどの大きさがある。二人は剣を抜いて戦いの準備をした。

「魔物か？」英は芋虫ににじり寄る。

「こんなでつかい虫はみたことないね」睦雄が言う。

二人は芋虫に近づく。虫かと思ったが、どちらかというほ乳類なのではないかと英は思った。毛が生えているし、よく見ると小さな足がある。四つ足で、これは獣といえるのかもしれない。顔も見えない。口吻が突き出た顔はモグラのようにも見えた。

英は電子音を聞いた。そして怪物を警戒しながら端末の画面を見る。モンスターデータの説明というタイトルで文章が書かれている。敵に近付くとディスプレイに敵のデータが表示され、データが表示されたモンスターはモンスター図鑑に載るようだ。

今目の前にいる怪物は地上スカンクモグラといって、地中を堀としないタイプのモグラのようだ。敵としては最弱で、唯一の攻撃手段である屁を食らうとしばらく動きが鈍くなるようだ。

あまり怖い相手とは思えなくなり、英は剣を構えて相手に斬りかかった。

嫌な悲鳴がした。怪物の体から血が流れ落ちる。傷口は深い。死んだかも知れない。いや、死んだ。怪物は消滅した。文字通りその場から綺麗さっぱりいなくなったのだ。

「お前って怖いなあ」

睦雄が哀れみを込めた目で英を見ている。

「何だよ」英は戸惑う。

「何もしてない生き物をいきなり斬り殺すなんてさあ。結構やばい奴だぜ、お前」

「だって相手は化け物じゃんか」

英の言い分に睦雄は首を振る。

「人畜無害っばかったぜ。哀れな子猫をいきなり斬り殺すようなも

んだな」

睦雄が言うつおりかもしれないと英は顔を赤らめる。向こうは何もしてこなかった。もしかしたらこちらが手を出さない限り何もしてこない睦雄の言うつおり人畜無害なモンスターなのかもしれない。『だけどさ、相手はモンスターなんだ。死に方だっておかしいだろ？ 急に消えてさ。現実の猫は消えたりしない。死体は残るはずだ。それにあれを倒したおかげで経験値が入ってレベルが上がるかもしれないぜ』

「レベルのために殺生か。こうはなりたくないね」

英は何か反論しようとしたが、上手い言い訳が出てこない。まあいい。睦雄は自分をからかっているだけだ。こんな世界にきて戸惑っているために英を攻撃して心の安定を図っている。

哀れなのはそっちだと英は思った。

英は何か反論しようとしたが、上手い言い訳が出てこない。まあいい。睦雄は自分をからかっているだけだ。こんな世界にきて戸惑っているために英を攻撃して心の安定を図っている。哀れなのはそっちだと英は思った。

二人は無口で歩き、ふと、どうしてこうも淡々と歩いているのだろうと英は思った。二人は仲がよかったはずだ。一緒にこうしてわけのわからない世界においやられて、まるで全てを理解しているかのように非現実的な世界を歩いている。これが今時の若者の風潮なのだろうかと英は空恐ろしくなる。何でも受け入れるのはいいが、どこかで発狂してしまいそうで、怖かった。

電子端末で経験値を調べる。プロフィール我慢でチェックすることができた。経験値は三になっていた。モンスター図鑑も調べる。地上スカンクモグラ。様々な習性が載っている。取得経験値は平均二。最大七。平均、ということは様々な要素によって変わってくるということなのだろうか。

次のレベルアップに必要な経験値の項目もあった。次は八だそうだ。

画面を閉じて進む。ロールプレイングゲームならこうして歩いていれば敵に遭遇するはずだ。それを再現するのなら、すぐに新たなモンスターが現れるだろう。

英の予想は当たり、道には二匹のカマキリがいた。子犬ほどあるカマキリで、あの鎌でざっくりやられたら痛そうだ。携帯端末をちらっと見る。大カマキリ。ふむ、みたまんま。

「俺にやらせてくれ」

睦雄が動いた。槍を持った睦雄は頼もしそうに見える。睦雄はおそらく槍なんて人生で持つのは初めてだろうに、随分手慣れた扱いで槍を振り回し、カマキリの一匹を突き、殺した。もう一匹は逃げ

るが、睦雄はそれを追わなかった。戦いはあっさりと終了した。

「あの鎌のリーチじゃ槍には敵わないだろ」睦雄は得意顔をする。

「そんなに槍を扱えるのはスキルのおかげなんだろう？」

「そりゃそうだろ。俺槍なんて初めて使うし。でもまるで自分の手に吸い付くような使い心地だ」

二人は進み、再び魔物と遭遇した。今度はリクガメだ。大きなリクガメで、大型の犬ほどある。だが動きは鈍く、放っておいてもいいだろうと判断し、道の真ん中にいる亀を避けて進んだ。

「堅そうな亀だったな」睦雄が言う。

「無駄な殺生はよくないよね」

それからまたしてもモンスターだ。笑いながらこちらに向かってくる、不気味な怪人。全身青いタイツを着た変態めいた姿に、英は背筋を凍らせた。よく見ると人間ではない。手が左右に二本ずつある。手の先は魔女のように爪が伸びていて、鋭くそして汚かった。

睦雄が槍で相手を素早く突いた。クリーチャーは動きを止めたが皮膚は硬く、刺し貫くことはできなかった。

四本の腕を使って槍の棒部分を掴み、怪物はそのまま睦雄ごと投げた。睦雄は背中を打ったようだ。

そろそろ自分の力を見せるときだ。英は剣を構え、颯爽と相手に飛びかかった。

両断するつもりだったが、相手は腕を一本犠牲にして英の剣の威力を弱めた。腕が落ちる。

三本の手で鋭く突いてくる。肩に、胸に痛みが走る。

英はよろめく。クリーチャーは近付いてくる。しかし、怪物の頭部から急に鋭利な刃先が現れた。怪物はそのまま倒れる。睦雄が敵の背後から槍の一撃を繰り出していたようだ。怪物は消滅する。

英は痛みを耐えながら端末を見る。レベルが二に上がっている。

「いつてて……」英は痛みをしかめる。服をめくって傷を確認する。抉られた箇所から血が出ている。

「薬草使えよ」睦雄が言う。

「そんなのないよ」英は弱々しい声を上げた。

「俺が持つてる」

睦雄はポケットから薬草を取り出した。

「これってそうだろ。あの鎧の男が持ってたやつだけど。効果はわからないから食べてみ」

「薬草って塗るもんじゃないの？」

「といいつつ英は薬草を少しかじってみた。するとすぐに傷口がふさがった。あつという間のことだった。

「……即効性ありすぎだろ」睦雄があきれ顔をする。「でもこれで大丈夫、だな。行くぞ」

「ちよつと待つて。何か落ちてる」

英は怪物が消滅した所の草むらに青い宝石があるのを発見する。

「ああこれ、換金できる宝石だ。敵を倒すとたまに落とすんだって」英は先ほど見た情報を思い出す。

「ならとつとけよ」

英はそれを取る。再び歩くとすぐに城下町が見えてきた。町は石壁に囲まれており、正面の入り口には門番が二人、槍を掲げて立っていた。英は町に入るために何らかの身分証のようなものが必要にはならないかと不安になった。しかし門番を越えようとしても実際には少し見られただけで声を掛けられることもなく、二人はあっさりと城下町の内部に入ることができた。

城下町は開けたところで、中世ヨーロッパ風の建物があちこちに建ち並び、中世ではありえないような大きな建物もいくつかあった。ビルのような大きさだ。沢山の人々が行き交っているが、人種も様々で、いろんな種族がごったがえしているようだった。

「ここがミサンガつてところ？」睦雄が聞いた。

「そうだよ。まずは宿を探そう。ついでにさっきの宝石を換金できる場所を探さないと。腹も減ったな」

換金できる場所はすぐにわかった。それは換金所と漢字で書かれているからだ。英達には実に奇妙な話に思えたが、実際こちらとしては有り難い話なので何も思わないことにする。

店内で換金を済ませる。青い宝石は一つで百八十エダになった。

武器は今のままで充分だと睦雄が言い、英もそれに同意する。それよりもまずは宿を取り、旅に必要となりそうな道具を探すのを先にすることにした。

宿はいくらでもあったのでその中でも安いと思われる宿を見つけた。一人八エダという破格の宿だ。

「きつとバランス調整の一環だよ。旅をこなすうちにだんだん高い宿になってくんだ」

「実にゲーム的ってわけね。バランス調整か……リアリテイないよなあ。まあ、いきなり超強い魔物が現れて死んだ、ってなるのはこっちとしても嫌だしな」

ともかくも、宿代に関しては大抵のRPGがそうであるように、さして気になる値段ではないようだ。だとすれば、金に関する問題はおそらく武具やその他なのだろう。あと、こちらの胃はゲームのように時間が経っても問題ないわけではない。食料問題も金がないと始まらない。

問題は多々あるし増えるのだろう。とりあえず、宿に泊まろう。

落ち着いた雰囲気だが狭く、小汚い部屋に案内される。そこで二人はベッドに横になってこれからのことを考え、そして全くわけがわからなくなった。

試練という単語を英は口にした。

「あ？」睦雄が反応する。

「試練だよ。これから先俺達はいろんな試練があると思うんだ。それを探すんだ。ゲームで試練を探すには――」

「民衆の話を聞くことだな。ここは城下町。城に行くって手もある」英は頷く。「食事を取って少し休んだら街の中を探索してみよう」

街中をうろつく。情報を得るには耳と目を活かすのが一番だ。直接誰かに聞くとというのは難しい。大体何を聞いていいのかすら不明だ。

新聞が落ちている。英はそれを手にとって読み始める。英にとってはあまり意味をなさない情報が多い。貴族の結婚の話や、姫の今日の有り難い話、貴族達のお茶会の様子、芸人たちのスキャンダル……など。

ロンダルの洞窟でまた巨大な鬼が出没！

目を引かれる内容だ。場所はここから百メートルもないエンリポ山の麓にあるロンダルの洞窟。ここにはミスリル鉱山があるようだ。最近そこに巨大な鬼がいて、採鉱の邪魔をするという。王は鬼を倒した者に千エダと魔法の鍵を授ける。

「クエストだな」睦雄が言う。

「これ、やってみるか？」

「いいぜ。魔法の鍵ってキーアイテムかもしれないし」

英は気になって端末を開いて検索してみた。魔法の鍵とは大抵の鍵なら形状を自在に変えて開けてしまうという素晴らしい鍵のようだ。重要性は高いが、冒険を終了させるのに必ず必要というものではないようだ。

だが確かに便利そうだ。きっと重要なものが眠っている宝の扉なんかを開くのに使えるだろう。しかし鬼ってなんだろうと英は考える。日本の鬼のように角を生やして虎模様のパンツを穿いている存在なのだろうか。

「下見にいつてみようぜ。敵が強そうならトンズラこけばいいし」

睦雄は意外と積極的だ。英は同意し、二人して城下町を抜けて問題の山に向かった。あっさりと着いた。看板があるので洞窟にもすぐにはたどり着く。洞窟内部に入ろうとしたが、張り紙が貼ってある。二人は読んでみた。

冒険初心者へ

二週目の俺達はこの場所に詳しいので一応、一週目の連中にアドバイス！ 鬼というのは結構手強い化け物で、どの職業できても結構だが、どの職業できてもそれなりに苦戦する。目標レベルは七！魔法の鍵は重宝するが一つしかないから早いもの勝ちだ

「鬼が出没してるってことはまだ魔法の鍵はあるってことだろうな」睦雄が言う。

「そうだけど、俺たちもそれを狙っているんだよ」

振り返ると、五人の男女が立っていた。戦士風の格好をした者や魔法使いの格好をしていた者もいるが、英達と同じような服装をしている者もいる。

「君たちもここにやってきた冒険初心者なんだろう？ スタート地点はまちまちのようだが、この城下町にはまず間違いなく集うようだからな」

ロングTシャツにチノパンツという出で立ちの背の低い男が言う。普通の格好だが、この世界では目立つ。

「そんな装備で大丈夫なのかね……お金は大事だぜ。俺達はこちらに来るまでに四つ手怪人を狩って稼いだんだ。おかげで色々装備も調えたし、レベルも八ある。だから悪いけど、ここにある魔法の鍵は俺達が手に入れてしまうよ」

「俺達も仲間に入れて貰えることってできないのかな？ 同じここに来てしまった者同士」

五人の男女はにやにや笑っている。黒い帽子に黒いローブという魔法使いじみた女が前に出た。

「駄目でしょ。あんたたちみたいなこの世界をなめきつたような感じの人たちじゃ、入ってもすぐ殺されるのがオチだと思うの。ちなみにここで死んだら本当に死んじゃうんだから。復活なんてゲームみたいなこともできないらしいしね」

「それじゃ、せいぜいレベルを上げて次に進んでくれ。ここは諦めて、ね」

五人はそう言う洞窟内に入ってしまった。入る前に魔法使いが何やら呟き、松明のように明るく輝いた。

「鍵は手に入らないかもしれないな。でもケチだな。仲間にしてくれてもいいのに。どうするリク？ 何もわからないのに、そこそこわかってる同じ境遇の連中と出会ったのに、もう別れちゃったけど」

「そんな言い方しなくても理解してるよ。しょうがないじゃん？ すぐにああいう連中に会ってことは、他にも俺達のようにこの世界に迷い込んでしまった奴もいるってことだろ。あんなに必要以上に邪険にするような奴ばかりじゃないと思うな。あんまりアレな連中だから、俺はこれもゲームイベントなんじゃないかと疑ってるけど」

英は思案する。

「とりあえず戻るか」

洞窟を背に城下町のほうへ戻る。途中で睦雄が立ち止まった。

森のほうを睦雄が見ている。英もそちらの方を見ると、煙が空に上がっていた。

狼煙だろうか。

「行つて見よう」英は言った。

二人は森の中へ入っていった。狼煙の方向へ進むと木々のない開けた場所に出る。その中央にたき火があり、火が燃えている。たき火の近くには金髪の女が座っていて、何かを食べている。魚のように見える。女は二人に気付くと手を横に振った。害意はなさそうだと二人は女に近付く。

「ハロ―。あなたたちも冒険者でしょ。魚食べていかない？」

英は美人だなと思った。年は若い。こちらと同じ年くらいだろうか。天然的な容姿に、少し華奢なようできて整ったプロポーションを持っている。胸もそれなりに大きい。

二人はなんだかよくわからずに腰を下ろし、火で焼かれた魚串を持たされた。それを食べる。美味かった。

「あんだなんでこんなところで魚焼いてたんだ？」睦雄がもつともな質問をする。

「あたしは赤西燐。職業は魔法使いでレベルは十八」

「十八！」英が驚く。「じゃあ随分魔物を狩ってきたんだ？」

燐は首を振った。「違うの。ここにきたのは君たちと同じだよ。みんなスタートは同じ。ここに連れて来られた時間は一緒なんだ。ただあたしはいろんな情報を調べて、エボン山にいるダイヤウルフっていうのが超経験値をくれるわりに弱いつてことを知ったの。そして運よくそいつらを見つけて、焼き殺したの。それを少しだけ繰り返し、すぐにレベルが上がったってわけ。それに私は普通の魔術師よりも魔法力が高いの……そういう制約でね」

「なんだか知らないけど、あんた……燐か。俺達と一緒に行動してくれよ。魔法使いは欲しい」

英は睦雄の積極性にたまに驚くことがある。燐と名乗る彼女はレベル十八だ。確かにメンバーになれば戦闘面で頼りになるかもしれない。魔法というのを見てみたいという気持ちもある。

「いいよ。そう言ってくれるのを待ってた。ところで二人の名前は？」

「俺は奥村睦雄でこっちが蓮池英。友達同士だ。年は十八の高三」

「あたしも高三だよ。奇遇だね。よろしくね」

燐は睦雄に手を差し出して握手を求めた。

「……まあ、よろしくな」

秀夫と燐が握手を交わす。

燐が仲間になった、と英は頭の中で呟いた。

城下町に戻る際に魔物と交戦した。それはアメーバのような、もしかするとスライムのような存在で、数は多かった。その際に新たな仲間は協力的な火炎で放ち、焼き尽くしてしまった。

「使えるな」睦雄がぼそりと言う。

ちよつとこれは凄いなと英も思う。凄い戦力になりそうだ。城下町に戻ると、先ほどの五人組がいた。見ると怪我を負っていたり衣服がぼろぼろだったり、ずいぶんと苦戦した様子がうかがえる。

「やあ」

思うところがあつて英は話しかけた。五人は胡乱な様子で英のほうを向いた。洞窟手前で話したときのような自信満々という様子はなく、随分暗い顔を浮かべている。

「お前から」背の低い男が言う。「鍵は手に入らなかった。あれは危険だ。やめとけ。レベルの少ない、ましてや俺達よりも数が少ないのにいつても無駄死にするだけだ。俺達だって這々の体で帰ってきたんだ。全滅するかと思った」

「それはご愁傷様。鬼は手強かった？ 張り紙通りならレベルは足りてるみたいだったけど」英は顔がにやつくのをなんとか堪えて尋ねた。

「あの張り紙は鵜呑みにしないほうがいいかも……。とにかく俺達には手に負えなかった。それじゃあな」

五人組は去っていく。

「連中は無理だった。俺達も行ってみよう」

「マジか」睦雄が顔を曇らせる。「だけど俺とお前のレベル少ないだろ」

「少し上げよう。燐がいればすぐに上がるよ」

三人は再び洞窟周辺にきた。その周辺で魔物を見つけ、燐がそれを燃やし尽くすというイージーな作業を繰り返した。そして四時間

ほど経ち、英と睦雄のレベルは七になっていた。休憩を取る。

「魔法って疲れるだろ？」

「うん。百メートル全力疾走したときのような疲れ方だね」

燐の調子が戻るまで休憩を取る。やがて燐が立ち上がってオーケーサインをだした。

「よし、行こう」

三人は洞窟内部へと入った。洞窟内は暗いが所々松明があり、先が見えないということはなかった。蝙蝠が天井に張り付いていて、雰囲気は抜群だった。

「鬼はどこにいるんだ」

睦雄が槍を構えている。五人組の敗退を知ってか、随分緊張しているように見える。

英も相当緊張している。剣を構え、いつでも目の前に敵が現れても対処できるように心を準備させていた。おかげで足取りは重く、進みは悪かった。

洞窟は進むうちに幅広になり、それから左右の分かれ道があった。

「右がいいと思うな」

英が言った。全くの勘だった。

「任せるよ」

右に曲がると、開けた場所に出た。そこは大広間と言っても過言ではない場所で、見たところ鬼が無数にいて、そして奥には宝箱に見える箱があった。

鬼達はゴブリンという存在を思っ浮かべる姿をしている。トールキンのホビットの物語や指輪物語に出てきそうな姿形をしているが、ただそれらの背は人間よりもずっと大きい。ざっと見ても三十匹ほどいる。中央には天井すれすれに頭がある巨大な鬼がいた。

「燃やして、燐」

英が小声で言う。

燐はうなずき、火炎が勢いよく鬼達をなめ回し、そして鬼達は火だるまになると床を転げ回った。

一番巨大な鬼だけは火を手で消して三人のほうに向かってくる。手には巨大な棍棒。あれがまともに当たったら命は一瞬で消し飛ぶだろう。

燐がなにやら呪文を唱えている。簡単な詠唱のあとに、妙な形に手を振るった。すると、三人の体が光輝いた。

巨大な棍棒が振るわれ、英は剣で防御しようとしたが、頭の中では死を覚悟していた。

大きな音がした。英は光輝くシールドによって守られていた。それは虹色に輝く魔法の盾だった。

睦雄が槍を投げる。それは偶然なのか狙ったのか、鬼の額に突き刺さった。鬼はあっさりと崩れ落ちる。地面が揺れ、鬼は死んだようだ。他の鬼たちも焼け死に、静寂に包まれた。

英は生き残った鬼が奇襲をかけてこないかと気にしながら宝箱の前まで近付く。目の前の宝箱は金色をしていて、いかにも宝箱という見た目をしている。

トラップの心配は考慮していなかった。あれだけの鬼を倒した後には得られる宝物だ。結果的に対して苦戦しなかったし、英自身は何もしてないにせよ、英は躊躇なく宝箱の取っ手を持ち上に開けた。鍵はかかっていない。そして中には小さな箱が入っていた。今度は銅製の箱で、英はそれを持ち上げると中を開けてみた。中には汚らしい布袋が入っていて、その中を調べると汚らしい、小さな銅製の指輪が入っていた。だいぶ汚れているようだが。英はそれを布袋に戻し、ポケットに入れておいた。

「鍵ゲットだぜ」英は笑顔を二人に向けた。

「クエスト達成ー。そんじゃ、戻ろっか」睦雄が言った。

洞窟から出ると外は薄暗かった。街に戻ると早速城まで行こうとしたが隣は疲れて休みたいといい、王に謁見するのは明日にして今日は宿屋でゆっくりすることにした。風呂に入り、食事を取って疲れと腹を癒すと早々に寝てしまう。今日はかなりハードな内容の一日だったのだ。

「メントウスの神の誘いによってよい眠りを。健やかに」眠る前に布団を用意してくれた女がそう言った。

「メントス？」睦雄が言う。

「メントウスって言ったよ。調べてみよっか」

ナズル大神に仕える神で夜と夢と眠りを司る。彼の加護があれば夜、睡眠を取る際に敵に襲われたり悪夢を見たりすることはなくなり、起きれば実に爽快な気分になっているという。悪夢を司るメントウスと対になる神、邪神メンデウスは彼の双子の妹であり、互いに命を狙いあっている。

「まあ……おやすみ」英は眠った。

翌日王の元へ向かうために城へ赴いた。城塞という様子の城は堅牢な建物で、兵士が城の外を固めている。警備兵の数はやけに多いだが旅人には寛容なのか、兵士は特に咎めることなく、何の許可もいらなく三人は城内に入ることができた。

「ザルだな」睦雄が呟く。

城の中は物々しく、随分兵士たちが行き交っている。城のことなど全くわからない英にもこの様子がいつもとは違うということを察することができた。

兵士二人が左右に立つ扉を開けると、広い空間に出た。赤い絨毯

の向こうに王がいるが、その手前に煌めく透明な何かが掛かっているのが見えた。おそらく防壁の魔法の類だろうと英は推測した。随分強力なものなのだろうか。今までの兵士たちの対応は、これがあるためなのか。

王に近付く。恰幅のいい御老人で、立派な口ひげを生やしている。頭には王冠を乗せているが、小さな龍の頭が正面にきていて迫力があつた。あれ欲しいなと英は思った。

「王様に話したいことがあるのですが」英は魔法壁の前になるとさういった。

「いいとも。話せ」王は低い声で言った。退屈そうな声だった。

「洞窟内の鬼を倒してきました。褒美をいただきたいのですが」

「ほう……ならば今兵士達に確認をさせる。しばし待て」

数十分経つと兵士がきていとも易々と魔法壁を越えて王の元へ向かった。そして王に耳打ちをする。王は頷く。

「確かに鬼は一掃されたようだ。だがお前たちが倒したという確証はない。お前たちが鬼を倒したのなら、宝箱を見つけたと思う。そこで何かを手にしなかったかな？」

英はポケットから布袋を取り出し、その中から指輪を出して王に見せた。

「ふむ。結構！ 見事！ よい働きをしてくれた。これで探鉱が再開される。見事な活躍であつたぞ異国の者よ。実はこれから邪神ドゥーンを崇める隣国サマルトマルとの戦争がある。もし可能ならば、おぬし達も是非参加して欲しい」王は手を二度叩いた。「この者達に褒美を！」

英達はケースに入れられた銀製の鍵と千エダを手に入れることができた。指輪はそのまま持っていていいと言う。

「その指輪は王家の指輪じゃ。守りの指輪で、他にも様々な効果があるという。嵌めておくがよい。あと、その布袋は捨てるでないぞ。物が無尽蔵に入るといふ有り難い布だ。取り出すときは取り出したものを心の中で思うだけでよいのだ」

指輪もそうだが、物をいくらでも入る布というのは素晴らしい。英は布を捨てなくてよかったと思った。どちらも汚らわしいので捨ててしまいたかったが、魔法のアイテムだったようだ。実に役立ちそうだ。

破裂の槍という槍が五百エダという破格で買えるらしい。武器屋は賑わっていて、その賑わいの原因を群がる民の一人に聞くとそういうことのようなのだ。

「抽選で一人手に入れることができる。破裂の槍といえば槍の中でも鋭く、素晴らしい槍だと有名だからな」

英と睦雄は顔を見合わせた。

「お前運がいいんだったよな確か。やってきてくれよ。俺槍使いだし、それ欲しいよ」

「仕方ないな」

睦雄の強化のためだと英も抽選に参加する。簡単なものだ。クジを引き、結果を待つだけ。英の数字は二十六番。

「二十六！ 二十六番の方はいますかあ！」

当たった。

新たな道具や武器を持って、城下町を後にする。次なる目的地は西にあるメトセラという町だ。そこで一泊し、それから北西にあるハプスブル城へと向かう予定だ。

「王様、戦いに参加してほしいってなかった？」睦雄が言う。
「やだよ。おっかない。自由だっていったじゃん。このイベントは強制じゃないんだ」

「ふうん。まあ俺も戦争なんてごめんだな」

街道をひたすら進む。周囲には道以外草むらしか見えず、起伏のある道が続いている。

「任せるけどさ、そこに行く理由ってなんだよ？」

歩きながら睦雄が聞いてくる。歩くのが嫌いな睦雄は相当苛立っている様子だ。

「到達推奨レベルを見て判断したんだ。後は難易度が高いし、大体この冒険は西へ西へと流れていくようにできているみたいだ」

魔物が現れる。空を飛ぶ豚という妙な化け物だ。英は先ほど破裂の槍を購入した武器屋で一緒に買っておいた弓を使うことにした。豚は大きな白い羽を使って中空を自在に飛んでいる。豚もおだてりや空を飛ぶらしいと英は弓を構える。豚はこちらをおちよくるかのよう空を八の字に飛んでいる。英は狙いを定めると弓を撃った。だが空飛ぶ豚には弓は当たらなかった。

「あたしがやるよ」

燐が炎の術を使った。豚は一瞬で丸焼きになり、地面に落ちた。
「これ、食べれそうだね」

燐は言うが英も睦雄も遠慮した。

次に魔物が現れたのは豚から五百メートルほど歩いた距離だった。現れたのは雑草が意志を持ったかのような化け物で、蔦を伸ばして英達の足を狙ってきた。燐が焼き尽くすが、彼女の顔が少し青いよ

うな気がする。昨日今日と魔法を立て続けに使っている。英は彼女にあまり無理をさせないように気をつけてやることにする。英もそうだが睦雄は強力な槍を持った戦士だ。女にばかり働かせるわけにもいくまい。

次に現れた魔物は、二本の足で立つ、人型のハンミョウのような魔物だった。見た様子では手強そうに見えた。おまけに二匹。

睦雄が槍を持って敵に躍りかかった。一撃すると、敵は炸裂した。まるで内部で爆発でもしたような。睦雄が驚いていると、二匹目が睦雄に攻撃しようとする。睦雄は腕に敵の鋭い爪の攻撃を受けた。

英は剣で魔物の腹を刺すが、思いのほか硬く、深くは刺さらない。

睦雄の槍が魔物の横腹に刺さる。すると魔物は臓腑をぶちまけて死んだ。

英は顔を拭った。怪物の血や臓物の飛沫がかかったのだ。

「このペースで敵と戦うのってちょっと辛いよな」睦雄が愚痴を言う。

「ああ。街道を進むのって実は危険なのかも。あんまり頻繁に遭遇するようなら道を変えてみようと思う」

しかしそのあと何時間も魔物は出現せず、三人はのんびりと歩いた。そして夕刻にメトセラについた。

メトセラは大きな街だが、面積が大きいというだけで街自体は大きなことのない、田舎だった。そこで三人は宿を取って休憩することにした。宿が三人部屋しか空いてないというので三人は一つの部屋で宿泊することになった。

三人部屋はそれなりに広かった。すでにベッドには布団が用意され、いつでも眠れた。疲れてはいるが、すぐに眠る気にはなれない。食後にと渡された酒は甘ったるいがそれなりに強く、ほろ酔い気分になる。

「こっからどうするんだ？」酩酊状態で睦雄が聞く。

「この町に用はない。明日になったらすぐにハプスブル城へ行こう。」

「一日あればつくさ」

「燐はちよつと買い物がいいたいですよ」燐は上機嫌そうだった。英の背中に足をつけ、マッサージをするかのように動かしている。英としては、鬱陶しかったが、どこか嬉しくもあり……。

「それも城に行けば城下町があるから、そこで済ましたほうがいいよ」

「面白くて可愛い服があればいいね」

ほろ酔いでテンションが上がっているのか、英に抱きつく。

「服より武器とか防具だろ？ 全く女は……」

睦雄は少し気に入らなそうにしている。英は睦雄が妬んでいるのだろうと燐を離れた。胸の感覚を密かに楽しんだのは内緒だ。結構大きかった。燐は可愛いし、魔法も得意だ。本当に、仲間になってくれてよかったと思う。あの煙を見つければ彼女と出会えなかったかもしれない。

「何よ、今時の若者が武器なんて持ったって。やっぱりファッションは大事でしょ」

「現実世界じゃあな」睦雄は欠伸をする。「ここはどこだと思ってるんだ」

「そういう睦雄はここがどこだか知ってるの？ 理解してるの？」

「しらねえからこうしてわけのわからないまま歩いているんだろうが。……」

しばらく静かになった。

「睦雄は家に帰りたいんだね。だけど、それならどうしてここにきたの？」

「はあ？ きたくてきたわけじゃないぞ」

燐が不思議そうな顔で睦雄を見た。

何だろう。ざらついた感覚に英は戸惑った。

「やめようぜ。明日も早いんだ。眠ろう？ ね」英は二人の会話に割って入る。

だが睦雄は不満そうだった。しかし、燐とそれ以上話すことはせ

ず、眠りについたらよかった。
「メントウスの神の誘いによってよい眠りを。健やかに」
いい、眠りに入った。 隣はそう

次の日は強行で、昼までには城についた。途中魔物との遭遇はあったが、燐の火力で焼き尽くしたり睦雄の槍で破裂させたりとわりかし苦戦せずに進めた。しかし城までもうすぐという時点にできたスズメキラービーが厄介だった。集団で、一匹一匹が雀ほどの大きさだ。毒性は低いが集団で刺されると命の危険性もあるという。何よりも針の痛みが激しいので、ダメージが多かった。英が三回刺され、睦雄が二回刺された。燐は炎のバリアを張ったので無事だったようだ。それからなんとか逃げたのだ。燐の癒しによってダメージは恢復できるが、毒により痛みはなかなか取れなかった。

ハプスブル城に着いた。城下町は城の周囲五百メートルにある。小さいが、密度が高い。ここに人口二万人の人間が住んでいるという。

はしゃいでいる燐を尻目に、英は情報探しに尽力した。

英には一つの思惑があった。この世界はもしかしたら早く進んだほうが、色々と得なのかもしれない。この前の洞窟の連中は結果的にはこちらが勝ったが、あれも燐がいなければどうなっていたかわからない。鍵も手に入らなかったかもしれない。

他にもここにきてる連中がいる。それも大体同時期に。ならば、早いもの勝ちの競争だという可能性は充分あり得る話ではないか。断定は全くできないが、なるべく急げるところは早くいったほうがいいのかもしれない。

そして英は、町の中央のお触れ板でよさそうな情報を見つけた。それは、マールウの森にて巨大な蛇が暴れ回っている。これを退治したものに褒美を取らすというものだった。詳しくは城まで着たれりと書かれてある。英はさっそく城に行くことにする。やはり、城があつたらその城の王に謁見するのはゲームの常識だ。

城に着くころには日が傾いていた。どうしても燐が買い物だけし

たいと駄々をこねたからだ。睦雄は我が儘いうなといていたが、英には燐の意見に反対はできない。なんといつてもここまでこれたのは燐のおかげだ。功労者にはそれなりの褒賞があつてしかるべきだ。買ひ物に付き合わす程度で彼女が満足するならそれでいい。むしろ彼女を一人にさせてこちらが愛想を尽かせでもされたら困るし。跳ね橋を越え、城門をくぐる。両隣の兵士はこちらを見ると槍を立てかけて通せんぼをした。

「待て待て。何用で城に入る気か？」

「僕たち、王様に会いたいんです。蛇を倒して、褒美が欲しいんです」

「おろち退治志願者か。まあ貴様達の格好を見ればそんなことは一目瞭然だが、一応建前としてな。入れ。まっすぐ進めば王の間につく」

英達は兵士の言うとおりに進んだ。そして、大きな広間に出た。赤い絨毯の敷かれた階段の奥に、王様がいた。太っており、白い髭を生やした恰幅の良い王だった。

「ふむ。そなたらの格好を見ればそなたらが蛇退治志願者だというのはわかる。今日はこの城の客間で泊まるがよろうて。明日には蛇狩りを開始するからの」

とんとん拍子に話が進んだと英は客間のベッドでくつろぎながら思った。

「大体この流れだと、明日俺達の同じ境遇の連中とご対面できそうだな」睦雄が言う。

「そうだね。たぶん、結構多いんじゃないかな」燐が応じた。三人は風呂に呼ばれ、豪華な風呂に入り、それから上手い食事にありついた。知っている料理もあれば、知らない料理もあったが、そのどれもが上手く三人は満腹になって部屋に戻った。

「待遇がいいから、そのぶん怖いな」英は言う。

「そうだな。蛇ってどれだけ強いのかな。調べて見ようか」

英はおろちで調べたが、該当はなかった。

「登録されるには蛇と出会わないといけないんだよ」 燐が説明する。

「まあ、そのときには画面を見ている暇なんてないかもね」

「さて、寝よつか。メントウスの誘いによってよりよき眠りを。健

やかに……あつてる？」

「オッケーだよ」 燐は睦雄にほほえみかけた。

次の日、英達は軽食をすませると広間に案内され、そこで彼らの予想通り、英達と同じ格好をした者達と出会った。二十人ほどいた。比較的若い者から五十代くらいまで、幅広いが男のほうが多いようだ。

英が特に目についたのは、肌が黒く、体格のいい屈強そうな女だ。女は髪を坊主頭にし、大きな槍と背中にも弓を構えている。目つきは鋭い。見た目だけの判断だが、強そうだ。

そしてもう一人。背の高い美青年。見てるだけで嫉妬でおかしくなりそうな顔に、英は苛立ちを隠せない。
むかつく。

首を振る。そんなことはどうでもいい。男の顔は整っているが、それ以上に他の有象無象とは違う何かを感じた。それは余裕そうなその顔つきのせいかもしれない。他の者たちがこれから始まるおろち退治に不安を隠せないでいる中、英が気になった二人だけが冷静に成り行きを見守っているように見えた。

「随分大勢だ」陸雄が呟いた。

「ああ。俺達の仲間、なのかな」

「違っただろ。競争相手だ。あいつら自分達が蛇やつつけて手柄を独り占めする気だ」

陸雄はそういう悪い風にし考えられない。それが彼の欠点だと英は思った。

「協力するんだよ、陸雄」？が陸雄に耳打ちした。

その光景を見ると、英は顔が火照るのを感じた。？は実に色気のある行為を平然とやる。いい女、ということかもしれない。

「みんなで協力しないとね。でないとおろちはやつつけられないよ？」

「馬鹿いつて。お前の火と俺の破裂の槍があればどんな敵もいちこ

るだつて」

王が兵士達を共だつて現れた。

「さあさあ放浪者共！　ここで雑談をして何になる！　おろち退治がお主達の使命だろうに。ここは城じゃ。向かうは森よ」

王が兵士達を引き連れ、英達放浪者を先導する。

ついていけばいいのだろうと英は流れに身を任せた。

睦雄が英の腰をつつく。睦雄を見ると、睦雄は何かを指さしている。睦雄が指さすほうには赤いドレスを着た、美しい黒髪を長く伸ばした女がいた。とつてもない美女で、英は自分が一瞬、どこで何をしているのか忘れるほどだった。

「ありやあこの国の姫さんだな。見ろよ……いい女すぎるだろ」まるでご馳走を見るかのように睦雄は言った。

英は何度も頷いた。

森の手前に一同はやってきた。英はマウの森と端末のディスプレイには表示されているのを確認した。他の連中も端末を覗いて確認をしている。

放浪者は服装は同じような現実世界の服装だが、装備品を見れば彼らがどんな職業に属しているのかわかる。弓だったり、杖だったり、剣だったり。様々だ。その中には自分のような無能力者を選んだ者もいるのだろうかと思は探したが、わからなかった。

「諸君！　この森の中におろちはある。蛇は豚や猪が好物で、そして香水のにおいにも引き寄せられる。畏を張るならこれを利用することだ。それから、蛇は体に三つの弱点の斑点を持っている。それらに上手く剣を刺せば蛇は眠りにつくであろう。さあ、ここからはそなたらの自由だ。どんな手を使っても構わん。蛇を再び眠りにつかせるのだ。さすれば褒美を取らせよう。ではさらばだ。勿論逃げても構わん。そんな輩の場合は即刻首を刎ねる。冗談じゃ！　いや冗談ではないが……ではさらば！　おお、姫が最後にそなたらに祝福を授けてくれるだろうよ」

王と兵士は去っていく。

「戦士達よ、ナズルの神の導きがありますよう」

姫はそういうと、去っていった。

残った者達は不平を言い始めた。

「俺達はどうしろってんだ？」

色々な議論が始まった。情報交換も長々とやった。蛇の特徴や大きさ。生態。チームの組み方。金の分配方法。特にチームの編成や金の話では揉めに揉め、結局話はうまく進まなかった。話し合いの中で英は色黒の女と睦雄が喧嘩しだすのを止めたりした。色黒の女は見た目通りきつい性格で、他の連中に対し情け無い玉無し共とののしった。睦雄は睦雄で勝手にチーム分けなんてするな、金は全部倒した者の取り分だとのたまっていた。睦雄はかなり興奮していて、英は自分の友人がこんな、金の亡者だったなんて、と情け無く呆れながらも、やはり睦雄は面白い奴だという友人に対して一貫しない感情を抱いた。

英は先ほど英がただ者ではないと感じた美青年と話した。向こうから話しかけてきたのだ。彼は名瀬京也といって、職業はレンジャーで本当の職業は美容師らしい。格闘技もやっていたようで、喧嘩には自信があるという。剣道や弓道もやっていたから武器を持つても強いようだ。それにレンジャーの職業のおかげで身のこなしが軽く、特に森では木々を利用して凄まじい跳躍力を持つという。それにレベルが現時点で二十八もあるらしい。硬質系の魔物を苦勞して倒して稼いだそうだ。今は二十五歳で婚約を控えた恋人のことを心配しているようだ。

死ぬ。話しながら英はこんなことを思った。自慢のつもりはないのだろうが、英には名瀬は死すべき定めの人に思えた。早く死んだ方が世のため人のためだ。

しかし……役に立ってくれるかもしれない。英は考えを改める。蛇のいい圈などに使えそうだ。英はにっこりと微笑み、名瀬の話に相づちを打った。

それから数時間経った。話はまだ長引いた。英は黙っていることにした。睦雄は荒れているし、なにぶんこちらもどうしていいのかわからない。戦士タイプではないので、戦いに参加しても足手まといにしなければならないような気がするし。

しかし自分も睦雄のように豪快に立ち回ればなあと思っただけで、なんで職業を一般人に設定してしまったのか、後悔ばかりが募る。

ようやく話し合いは終わったが、別に何も決まらなかった。好き勝手にやればいい、そんな感じだった。各人や最初に組んでいるチームでそれぞれ勝手に森の中に入っていく。

「俺は蛇を退治するぞ、英。お前は どうする？　ここにいる連中に任しても仕方ないだろうし」

「燐はどうするって？」

「さあ。どっちみち俺は行くぞ。あいつをやればかなりの賞金と経験値とそれにお宝が手に入るんだ。行くしか手はないだろ」

睦雄は戦いがしたいのか、それとも何なのだろう。男の証明でもしたいのか。最初は燐に男らしさをアピールしたいがためと思っただけが、少し違うように見える。

眼鏡が曇ってきた。英は眼鏡を取り外し、レンズに息を吹きかけて吹いた。

「こんな世界でも眼は悪いままなんだな」睦雄が言った。

「何でも思い通りになったらこんなところでこんな押し問答やっとないだろ」

「そりゃあ、そうかも」

睦雄が納得したようにそう言い、英はくすりと笑った。やっぱり睦雄は面白い奴だ。友人として付き合う価値のある男。だからだろうか。こんな状況でも、二人ならやっていけそうな気がする。

「俺も行くよ。でも蛇はどのみち俺達を襲うだろうな」

「ゲームイベント的に？」

「うーん、というよりも、そう運命付けされてるような。まあいいよ。弓を貸してくれ」

英は弓を担ぎ、睦雄は槍を手にした。他の現実世界からの来訪者も戦う意志を示し始めたとみえ幾人か戦いの準備を始めている。色黒の女と目があった。その女が英に近付いてきた。女が近付くと英は緊張したが、女は厳めしい顔を崩して握手を求めてきた。

「高校生くらいのおんなたらの方がここに居る誰よりも勇気がありそう。あたしの名前は網倉だ。よろしく頼むよ」

「英と睦雄です」

握手は力強く、明らかにこちらの力加減を試すものだった。

「へえ、見かけによらないねえ」女はそういうと英の肩を軽く叩き、英から離れていった。

「ゴリラみたいな女だけど頼りになりそう。散々口論したけど、あいつが一番蛇退治に向いてそう」睦雄が英の耳元で呟いた。

「ゴリラはいいすぎだよ。筋肉質だけどね」

「おや、惚れたか？」

「死ねよ」

「いやそれも言い過ぎだろ」

いつの間にかいなくなっていた燐がいつの間にか戻ってきていた。彼女はいつの間にか小刀を二つ持っていて、さらに焼け焦げた何かを持っていた。何らかの生物の焦げ後のように見える。バスケットには野菜類が入っているようだ。

「それ、兎か？」睦雄が聞いた。

「正解。お腹すいたでしょ？ 兎肉のシチューにしようよ」

毎度のことだが英は燐の頼もしさに呆れた。

腹ごしらえは済み、三人は探索を開始した。探索は他の者たちとは別々だが、見つけたら魔法の首飾りで教えてくれる手筈になっている。

「俺達が蛇をやつつけるんだ。そうすりゃ、金は山分けしないですむ」

「何言ってるんだ。金は誰が倒しても一緒に戦う連中と分けた方がいい。そうすれば、後々助けてくれるかもしれない」

睦雄は嘆くような顔で英を見つめ、ため息をついた。

「分けたら大した金にならんぞ」

「仕方ないだろ。そういう取り決めだ。その代わり誰がやっても金は手に入るんだ」

「つまんねえな」

「睦雄、我慢しようよ。何も手に入らないよりましだと思うよ」
「燐が言った。」

「わかったよ……ったく」

英は思う。睦雄はもつと計算高く生きたほうがいい。そのほうが世の中ももう少し上手く涉っていける。彼らを単なる競争相手と見るのではなく、共に共闘する仲間と考える。そして利用するのだ。互いにとってそれが一番のメリットになる。

——燐がいるのは心強い。ファイアスターターな彼女はおそらく三人の中ではもっとも頼りになる存在だ。睦雄はソルジャーとしての能力を遺憾なく発揮すればきつと役に立つ。

使える者は利用する。友人ですらもだ。

そして自分自身もだ。せつかくファンタジーゲームの世界を現実世界のように体験しているのに、何の特殊能力もないが、それでも武器は使える。

人間は蛇よりも賢いはずだ。相手が木のように大きなウワバミだとしても、やつつけてみせる。

「それにしても不気味な森だなあ」

睦雄が呟いた。確かに森は不気味だった。今歩いているアスファルトの舗道以外は鬱蒼と茂った木々が邪魔をしていて奥には進めないくらいだ。

蛇だけが敵ではないかもしれないなと英は思った。こんな大きな

森だ。そしてここはファンタジー世界の森なのだ。何か恐ろしい存在がいてもおかしくはない。

森がさがさと音を立てる。

「さっそくおでましか？」睦雄がしなる木々のほうに槍を向けた。

英も刀を構えた。

現れたのは大蛇ではないようだった。猿だった。チンパンジーに似ているが、異様に長い尻尾を持っていて、尾だけで木の高さほどありそうだった。

「尾長ザルだね」燐が言った。

「知ってるのか？」英が聞く。

「見たまを言っただけ」

猿は長い尾を叩くかかげ、そして鞭のように英たちに振るってきた。細いがその威力は大したもので、三人は吹き飛ばされた。

英は倒れたひょうしに眼鏡と刀を落としたがすぐに起き上がって二つを拾った。そしてすぐに猿に向き合う。

猿は睦雄と戦っていた。睦雄は長い尾の二度目の攻撃を槍で防いでいたが、槍を尻尾に絡め取られそうになっていた。睦雄は必死で槍の柄を掴んでそれを食い止めようとしている。

これはチャンスだ。睦雄に猿が集中している隙に、猿を斬り殺してしまおう。

英は素早く動いた。しかし猿はすぐに英の攻撃に気付いて後方に避けて刀の一撃を避けた。そして素早く尾を戻して英をなぎ払った。また眼鏡が飛んだ。

英が起き上がって眼鏡を拾ったとき、少し熱さを感じた。まるですぐ近くで炎が燃えたような。

猿を見ると、焼け焦げていた。

「ウェルダン一丁」燐が言った。

「俺はミディアム派。どっちみちこれは食わねえけど」睦雄が言う。英は大きく息を吐き、服についた汚れを手で払った。結局燐頼りだ。この世界は魔法使いが有利なようにできているのだろうか。バ

ランス調整間違っていないだろうか。

「行こうか。エメラルドの都へ」英は力なく言った。

「何それ？」燐は首をかしげた。

三人は進み、そして彼らは再び広場へとやってきた。適当に進んだ結果、また元の場所に戻ったということだ。残っている者たちは不審げに英たちを見て、英たち三人は決まり悪そうにその場から離れ再び森を探索する。やがてくたびれてきたので休もうとすると今度は大きな亀が現れた。亀は大型犬と同じほど大きさがあり、英たちを見るとすぐに甲羅に頭と足を隠した。普通の亀と違ってその亀は甲羅の上部と腹の盛り上がりが同一で、頭と足を引っ込めると完全な球体になるようだった。

「丸亀だね」燐が言う。

「見たままか」睦雄が言った。「けどなんか……やばそうだな」「うーん」

英は予想した。実に単純な予想だ。そしてそれは的中することになる。亀は球体を生かし、辺りを転がり初めて加速をつけ、そして勢いがつくと三人に向かってきた。

三人は素早く散り散りに逃げた。勢いよく亀の甲羅が木にぶつかり、木の幹が抉れた。

こりやあまずい。英は思った。

「燐、火、使える？」

燐は英の問いに答える前に火？の術を亀の球体にぶつけていた。しかし炎がなくなっても亀はまだ動き、こちらに再び転がってきていた。

一体どういう理屈で球体を動かしているんだろうと英は思った。ダンゴムシは丸まった状態で動けないのに。

英は亀の体当たりをくらって吹っ飛んだ。睦雄が英の名前を叫んだ。凄まじい衝撃で、英は五メートルほど飛んで木に叩き付けられた。

亀は勢いを失っておらず、今度は睦雄のほうに加速した。睦雄は

逃げずに亀に立ち向かうことにしたようだ。彼はソルジャーの能力を使い、動体視力を強化した。そして槍を扱うスキルを強化し、相手のウィークポイントである、頭と足が隠れている場所に、槍を突っ込ませた。鋭い突きだった。亀は深々と右前足の隠れている部分に槍を突かれ、動かなくなった。

睦雄は動かない亀の甲羅を蹴ってみた。そのまま転がり、森の中に入っていく。

「死んだようだな」睦雄は槍についた亀の体液などの汚れを土に刺して払った。「英、大丈夫なのか？」

英はすでに起き上がっていた。体は問題ない。

「あの布の鉄の腹巻きにちょうど当たったんだ。背中もちょうどそこでさ。かろうじてダメージはなかったみたい。ただ全身がちょっと衝撃を受けたよ」

「少し休んだほうがいいよ」燐が優しく言った。

それから三人は少しだけ休息を取った。亀を食べるのはどうだろうと燐が提案したが、なんだか食べる気にはなれず英は却下した。再び歩く。

「思っただけど……」燐が喋り始めた。「蛇を探しに歩き回る必要ない気がするんだよね。それよりも蛇をこちらにおびき寄せるような仕掛けを作ればいいんじゃないの？」

「どんな？」

「餌だよ。まるまる太った焼き豚をあの大広場の真ん中に用意しておくの。そして蛇がご馳走だとやってきたときに、みんなで斬りまくる」

「なんだかなあ」

だが英は考えてみた。いいかもしれない。闇雲に歩き回って疲労したときに蛇に襲われるよりも、こちらが準備万端で、おまけに仲間が揃っているときに蛇がこれるようにすれば――。

「それ、やってみようか」

首飾りで他の狩人たちと連絡を取り、広場に集まってもらう。生け贄は近くの川で穫れた大きな猪だ。燐の火であっさりと丸焼けになってもらった。広場にそれを置いて、そして木の陰に隠れて待機。蛇がくるのを待つのだ。

「適当に動き回るよりはましかもね」色黒の網倉はこの案を気に入ったようだ。最初に英に戻ってくれと言われたときにはだいぶ激昂していたが。

「おびき寄せ作戦なんて上手くいくとは思えないな」睦雄が今更そんなことを言った。「だってこんな作戦、今までやってきてきただろ。あの王様は無能そうだけどさ」

「まあ見てろよ。所詮これははゲームの世界だぜ。穴なんていくらでもあるって」

「お前って意外と楽観的なのかもな」

英自身もこれだけでは不十分だとわかっていた。だから、おびき寄せる係が必要だと思った。蛇の好きな香水は猪にも沢山浴びさせているが、近くにいないのでは効果は薄いであろう。

ならば、香水をたつぷりと浴びた人間が蛇を探すのだ。蛇は臭いに敏感らしいので、嗅ぎ分けたら襲いかかってくるだろう。

だが危険な任務だ。たった一人で、危険な森の中に入り蛇の近くまで……並の戦士では務まらない大役。

そして決定した。

「名瀬さん頼みます」

英は名瀬にお願いすることにした。色黒の女は能力的に強くて頼もしいが、能力が実に優れ、なおかつ能力なしでもやたらと強い名瀬がベストだと判断したのだ。

名瀬は英から説明を聞いて、黙って引き受けた。さすがは顔がいいだけあると英は思った。しかしなんだか腹立たしくもあった。か

つこつよすぎるな。そのまま蛇に食われたら笑えるのに。そんな気持ちを持ちを振り払う。

名瀬に香水をたっぷり、隅々まで振りかける。

「これで大丈夫。名瀬さんはどうみても蛇の大好物ですよ」

「なんだか嫌な言い方だな……まあ、行ってくるよ。死なないことを祈っててくれ」

「縁起でもない」

「名瀬さんって格好いいよね」

名瀬が去ると燐が言った。

「ま、これが今生の別れじゃないと良いけど」睦雄が言った。

やがて名瀬が戻ってきた。思っていたよりも早い帰還だった。あらん限りの走りとその顔を見れば、名瀬が追われているのは一目瞭然だった。

「戦いの準備を！」英が叫んだ。

やがて蛇がやってきた。英は思わず悲鳴を上げそうになった。蛇は大きかった。英の予想通りの大きさだった。木ほど大きいが森の外からはわからないほどの大きさ。だがそれは、実際に見てみると信じられないほどの大きさだった。巨大なアナコンダを倍にしたような大きさは、英の耐えられるスケールを越えていた。しかも蛇は早かった。遠くから見えたと思うとあっという間に近くまできて、いつの間にか猪を丸呑みにしていた。

名瀬は少しは戦ったようだ。蛇の頭部には切り傷があり、少し血が流れている。

「かれ！」網倉が号令をかけ、一斉に狩人が飛び出した。しかし潜んでいる数より随分少なかった。

睦雄が動いたので英は仕方なく動いた。蛇の胴体に炎が出現し、蛇がのたうち回った。燐がやったのだろうと英はわかったが、タイミングが悪いと思った。蛇が暴れたせいで狩人たちが巻き添えを食って吹き飛ばされている。

二本の剣で網倉は蛇に斬りかかった。黒縁模様の蛇の、急所である三つの斑に斬りつければ蛇は寝てしまうという。しかし千以上はありそうな斑のどれを斬りつけていいのか、誰にもわからなかった。適当に斬りつけまくればそのうち当たるだろう。三つのうち一つでも当たれば蛇は相当動きが鈍るそうだから。

英は暴れるのを止めた蛇の体に刀を振るった。まるで分厚いゴムタイヤに斬りつけたかのような弾力だが、刀は蛇の胴に切り傷を付けた。いける。

蛇が尾を持ち上げ、大きく落としてきた。英はとっさに避けたが、大黒は尾の下敷きになった。

英は一瞬最悪の予想をしたが、人に構っている暇はなかった。蛇の尾を避けると、今度は蛇の顔が英のめのまえに現れた。驚くこともできないほどの素早く蛇は胴を曲げて顔を尾の近くまで持ってきたのだ。

さあおしまいだ。英はそう思った。蛇の口が大きく開いた。

巨大な矢が蛇の舌に刺さり、蛇はたまらず苦悶の叫びを上げて悶え苦しみ、再び暴れて狩人たちを吹き飛ばした。

英も吹き飛んだ。再び木にぶつかったが、布鉄の腹巻きにまた守られた。

なんだか随分危険を回避してるな。こんなときだが、英は思う。この中では運がいいかもしれないが、本当に運がよければこんなところにはきてはいないのだ。

暴れる蛇の胴上に乗っているのは睦雄だ。彼は破裂の槍を大蛇の背の下に深々と突き刺し、それからそれを掴んで蛇が暴れても振り落とされないようにし、そのままもう一つの普通の槍で蛇の背中を突き放題突き刺していた。

あのままでは睦雄が蛇に狙われると英は思った。蛇の矛先を別のほうに向けないと、睦雄が、勇敢だが丸呑みという、極めて嫌な死に方をする。

睦雄は勇猛だが射手にとっては彼は邪魔な存在でしかないようだ。

あまりいい状況ではないことは明白で、英は状況打破を考えた。弓を撃ちづらいが、なんとか狙って撃っている。睦雄の攻撃は見事で、どんどん槍を突き刺している。あれでは蛇もたまらないだろう。剣を持った男たちも蛇の周りに群がり剣を叩き付けている。のたうち回り暴れまくる蛇に果敢に立ち向かうのは見事だが、大体蛇に近付くことなく吹き飛ばされる。

一人が丸呑みにされた。一瞬の出来事だった。誰だろうと英は思う。太った男だ。彼は挑もうとして勇気をなくしたようで、背を向けた。背中を向けたのがまずかったのかもしれない。

誰だったわけ？ 英は思い出すことができない。吹き飛ばされた連中は無事だろうか。

名瀬が一人、大剣を持って蛇に飛びかかった。彼は自分の特技を最大限に生かして蛇の尾の攻撃を躲し、蛇の胴に鋭い一撃を何度も何度も見舞った。

蛇の背にはまだ睦雄がいて、頑張っている。さらに燐の炎が睦雄と名瀬に被害がかからないように絶妙な攻撃を仕掛ける。

さらに大きな矢が蛇を襲う。網倉だ。彼女は大きな二刀で蛇を滅多切りにしていたが、蛇に四度吹っ飛ばされると作戦を変えて矢で攻撃をすることにしたようだ。太い矢は一撃一撃が強烈そうで、蛇は矢が胴に刺さるたびに苦悶の声を上げた。

これでは勝てないと英は思う。蛇の巨体は並ではない。睦雄たちが頑張っているが、もう一押し必要だ。英は自分も参戦することにした。自分の能力がガンブル強さなら、蛇の弱点の斑模様を一発で見つけることができるかもしれない。蛇の動きは僅かに鈍っている気がする。もしかしたらすでに弱点の一つくらいは斬っているのかもしれない。

英は刀を持って再び蛇に近付いた。動き回る尾は厄介だが、名瀬がいい囷になってくれている。彼はそれが役目なのだろう。せいぜいいい具合に蛇の攻撃を集中してもらいたい。

英は蛇の胴の前にきた。そして再び蛇の胴を斬りつけた。先ほどは慌てていて、斑模様を気にする暇などなかった。今度は冷静に斑模様の一つを斬った。

動きが極端に鈍った。英は自分でも信じられない思いだった。

「いけるぞ！」睦雄が上から叫んでいる。

「チャンスだぞ！」名瀬も騒ぐ。

うるさいなと思いつつ英は再び刀を振るい、斑模様の一つを斬った。蛇の動きは鈍い。今度はさらに慎重に狙うことができた。丸い黒斑模様を斬る。

丸い？

蛇は動かなくなった。英は奇跡的なこの運の良さに驚く前に、丸い斑模様を見た。そして、その前に斬った模様を見る。

同じだ。二つの斑模様は正確な円となっている。他の斑模様は湾曲していて、歪んでいる。

あと一つはどこにあるのかわからないがおそらく丸いのだろう。つまり、丸い斑模様だとわかっていればもっとあっさり勝てたのだ。勝負運に頼ることなく。

くだらない。だが情報はなかった。あの体躯が暴れ回っていたのだ、それに気付くのは難しい。勝利を素直に喜ぼう。

蛇の眼は閉じて動かない。

「こいつ死んでないんだろ？」睦雄が言う。「止め刺すか？」

「いや、いいだろ。眠らせろって話だし。俺達の役目は終わりだ。

王様に連絡しよう」英は言った。

14 (前書き)

三分のーくらいですかね

蛇との戦いには勝利した。しかし、展開的に行くならここは序盤の終わりくらいだろうか。こんな宴の後に別の展開がまっているのは、ゲームではありがちだが。

「よお、なに暗い顔してんだよ？」

睦雄が英の顔をのぞき込んだ。

こいつは何も考えてないんだろうな、英は思う。

「ひょっとしてあれか？ この後の展開のことを考えてるのか？ なんかイベントが起きそうな予感でもするもんな。けど今は、だされた食事や酒を楽しめよ。やな予感は俺だつてする。けど、考えるな」

城にはすぐに着いた。兵達が並んで歓迎ムードだった。兵達の合間から王と女王がやってきた。

王は満足そうに笑った。「やってくれたようではないか。素晴らしいぞ。ささ、城内に。盛大な宴を催そうではないか」

王の言うとおり、宴は盛大に豪華に行われた。英は葡萄ジュースを飲みながら踊り子の踊りを見ていた。誰もが美人でスタイルがよく、見て楽しいが、姫の美しさには敵わない。英は姫の姿を探した。姫は兵士達に囲まれて微笑んでいた。絶世の美女だ。彼女はなんというか、神秘的でいて、それでいて究極的に優しい微笑を浮かべる。見ているだけで自分の血液が全て収束してしまうような、変な気分。英はあまり見るのは目に毒だと思いつつも彼女を見ずにはいられなかった。

肩を叩かれる。睦雄だった。

「元気出せよ。そのうちいい女見つかるって」

「どういう意味？」

肩を二度叩く。

「姫様とお前つてわけにはいかないだろ？」

「そんなこと——」

「ああ、いいさ。酒でも飲んで忘れろよ」

睦雄は英のグラスの葡萄酒を飲み干すとカクテルを注いだ。

「飲めよ」

英はグラスを手に持つ。そうだ、祝いの席なんだ。それに睦雄の言うとおり、彼女は高嶺の花だ。思い焦がれようと手には入らない。英は一気にカクテルを飲み干した。

「やるじゃん。もつといけよ」

睦雄はさらに注ぎ、英はそれも一気に飲み干す。睦雄が口笛を吹く。

「お前酒飲みの素質あるよ。もつといけ」

さらに三杯。体が熱く、火照っている。世界が回っていく。

英は倒れ、意識を無くした。

起きると個室にいた。見慣れぬ天井で英はがっかりする。ここで起きるといつもがっかりする。いつもの、見知った部屋で起きたい。もうこんなことはうんざりだ。

「起きましたか？」

英は驚いて声の方向を見る。部屋の扉の前に、姫がいた。姫は微笑している。

「お酒を飲み過ぎたんでしょう。宴会だからといって羽目を外しすぎましたね」

「すみません」

「謝る必要はありませんよ。あなた方は英雄なんです。今日は存分に浮かれて良い日なんですよ。もし気分がよくなったらまた宴会場にいらしてください。ショーはまだありますし、望めば料理もお酒もいくらでもありますからね。そうそう、これをあなたに渡しておきましょう」

姫は英に、首飾りを渡した。楕円形の宝石のついた首飾りで、血

のような赤色が印象的だ。

「これは？」

「あなたが今後旅で強敵と戦い続けるのなら、この守りがきつと役に立つてくれるはずです。それとこれも」

手渡されたのはナイフだ。普通のナイフよりも刃が長く、見るからに鋭い。柄の部分にはハプスブル王家の家紋である蛇が彫つてある。

「この短剣は代々伝わる家宝です。これは貴方の意志に応じて刃の長さを調節できる魔法の剣です。どうか使い方を誤らないように。間違つて自分や仲間を傷つけてしまうことがないように扱ってくださいね」

「ありがとうございます。大切にします」

「では、また会いましょう」

姫はそう言つと英の頬にキスをした。

「これも私の感謝の印です」

姫は去り、英は頬を頬を触り、そして嬉しく思いながらも、唇にしてくれれば、と思つたりもした。

英が宴会に戻ると睦雄と燐が楽しげに酒を飲んでいた。

「大丈夫か？」名瀬が声をかけてきた。「君の友人達は飲んでるよ。まあ、カクテルをさらに薄めたものだからね、あれなら長持ちもするさ」

英は頷いた。睦雄と燐は実に楽しげで、英は自分が入っていくのはためらわれた。彼らの邪魔をするのは無粋というものかもしれない。しかし自分が酒につぶれたのは睦雄のせいだ。睦雄を酔い潰してやりたい。

まあいい。放っておくさ。あいつのおかげで姫と二人きりになれたのかもしれないし。

姫のキスは幸運を呼ぶ。それが本当なら、英は思う。旅の幸先はいいかもしれない。

適当なところに座り、魔法使い達の火のショーを楽しむ。適当に食べている肉の味が鳥でも牛でも豚でもなさそうなので英は兵士に聞いてみた。

「あなた方が倒した大蛇の肉ですよ」

聞かなければよかった。しかし美味しいので腹が満腹になるまで食べる。

やがて宴もたけなわになり、英たちは豪華な個室に案内された。酒の酔いも抜けきらない英は豪華な布団で豪華な眠りについた。

目が覚める。部屋を出ると女中たちが英を着替えさせ、奇抜だが豪華な服に着替えさせた。

「俺の服は？」

「洗いました。必要なら後で渡しますよ」

すっかり整うと朝食だ。馬鹿みたいに横に長いテーブルに座る。

横には睦雄がいた。

「よお、夕べは大丈夫だったか？」

「平気さ。そっちは随分楽しそうだったじゃない」

睦雄は少し恥ずかしそうな顔をし、英はにやりとした。睦雄をいじるチャンスがきたかもしれない。

「熱々なのもほどにしとけよ」

「そんなんじゃないよ。酒が入っていい気分だったんだ」

「酒と女だもんな。そりゃあいい気分になるだろうさ」

「英、ちよつとおじん臭いぞ。……昨日は悪かったよ。一気飲みするとは思わなかった」

英はまだ酒気が抜けきれていなかった。酒のことなんて考えたくない。

「いいよ、酒なんて正月くらいしか飲んだことないんだから。弱い俺が駄目なんだ」

「まあ、これからこういう機会増えるといいな。毎日宴会ならここにいても楽しいし」

そんなに甘くないだろうなと英は憂鬱になった。

出立の用意を調えるが、睦雄はいかにも気乗りしない様子だった。
「もう少しここにお世話になるうぜ。なあ燐？」

燐は首を振った。「そりゃあ、そうしたいけどね。だけどそのぶん元の世界に戻るのは遅くなるんだよ」

睦雄は燐がそういつても不服そうにしていた。

「どっちみち俺は行くよ。じゃあな陸」

「ちよつと待てよ。わかった、俺も行くよ」

英はわかつている。睦雄が独りでここに留まることなんてありえないということを。

「全く冷たいんだからな」睦雄はぶつくさ文句を言っている。

兵士達や王に惜しまれ、英達三人は出立した。名瀬や網倉はすでに立出しているようで、他の異邦者たちも半分以上はここを出たらしい。

「俺達も急がないとな。なあ、睦雄。早いもの勝ちってこと忘れてたか？」

後方から馬の駆ける音が聞こえてきた。かなりの数のようだ。

睦雄がしかめ面をしている。

「なんかちよつと嫌な感じだな……俺の第六感が言ってるぜ。隠れたほうがいいってな」

騎馬隊が追いかけてきている。正面には王がいて、彼は王冠を被っているがいつものいかにも王という格好ではなく、銀色に光る立派な鎧を着ている。

「隠れよう」

英は言い、三人は木々の中に身を潜めた

「どこだあ、あの連中め！ 我の家宝を奪いおってからに！ 我が家紋の入った剣を姫が渡してしまったとは——あれはな、最強の剣なんじゃぞ！ 馬鹿者があ！」

王達は馬を疾駆させ、奥へと行き見えなくなった。

「普通の道は迂回しようぜ」睦雄が言った。

展開はこういうことなのかと英は体を小刻みに震わせながら思った。震える手で剣を取り出す。

「それか？ 王の大事な剣つてのは」睦雄が言う。

「そうみたい」

「もしかして姫さんからもらったのか」

「そうなんだ」

睦雄と燐がため息をついた。

「こういう展開とはね。まともに鉢合わせたら命はなかったな」

「あたしの炎でもあの数は無理だよ」

「で、でもさ、それを覚悟で姫はこれを渡してくれたわけだよ。今ので戦いは回避できたし、王が言ってたろ？ 最強の剣だって。たぶん王と確執になるだけの価値はあると思うな」

「だといけどな」

三人は騎馬隊の通った道を迂回し、別の道を通って西へと向かった。次なる目的地はハロー砂漠。東西の間五十キロの、灼熱地帯。そして夜は厳寒で、備えを万全にしておかないと命が危ないという。大森林を越え、様々な人々が行き交う町に出た。彼らは一様に白いフードを被ったカルム人ばかりだった。

「どうしろっていうのかな？」睦雄が戸惑う。

「そうだなあ。まずは宿を見つけて、そして砂漠の装備を調べよう」

「まあ、そうでしょうね」英の提案に睦雄はそう返した。

「何だよ？」

「別に。俺だってそのくらいしか思いつかない。いいさ、行こ行こ。燐も歩き疲れたろ？」

「別に。十キロほどしか歩いてないしね」

燐は実際余裕そうに見えた。彼女はもしかしたらこの中で一番タフかもしれない。だが彼女は腹を押さえて苦笑いした。

「でもお腹やばい」

「宿より前に昼ごしらえと行こうぜ」

「そのほうがいいな。俺も腹ぺこだもん」

三人は町を散策し、どうやらいい匂いのする場所を発見した。香ばしい匂いに惹かれ、三人は中に入ってしまった。中は広く、カウンターの椅子には何十人というカメル人が食事を取っている。

英達は開いている席に座った。

「いらつしゃい。ご注文は？」

カウンター越しに聞いてくる男は上半身裸の坊主頭の厳つい男だった。

英はメニューを読んだ。彼らの言葉や文字が全国共通なのは素晴らしいことだ。カタカタで見たこともないような料理が書かれている。

「テンチン一つ」英は言った。値段は六エダ。比較的安い。

「俺もそれで」睦雄が言う。その後英の耳元にテンチンを少し変えた言葉を発したが、英は無視した。

「じゃああたしも」

「テンチン三つですね」

三人は同じメニューを頼んだが、勿論どんな料理なのかはわからない。数分して出された料理は焼きそばに似ていた。味は質素なもので、実際、麺に胡椒を振りかけたような味がした。つまらない料理だなと英は思った。他の二人もどうみても腹を満たすために我慢して食べているように見える。

それを食し、計十八エダを払い外にでた。

「なんというか……カラムの飯は俺駄目だわ」睦雄が言った。

「腹ごなしにはなっただろ。宿を探そう」

英はガイドブックを取り出し、情報を検索した。魔法の本は実に便利で、英はすぐにこの町の情報を見つけ出した。この町の名は砂漠の手前にある町、ユンボンだ。人口千六百人。カメル人が主に暮らす町で、三大神の一人であるナローの神を崇めている。見所は特にないようで、お勧め料理はヤハナという店の、サソリのスープの

ようだ。

よさそうな宿を発見した。早速行ってみることにする。先ほどの料理はぱつとしなかったが、サソリのスープを食べるのもどうかと思うので、決める前に本を見て料理屋を探すという行為を失念していたことに対する後悔はしなくても済みそうだった。

英は本の示す通りの場所に向かう。カルム人の行き交う大通りから裏路地に向かう。途端に人気の少ない場所になる。少しすると目的の所にたどり着いた。

「ここだよ」

その宿はぼろぼろの木造二階建てだった。民宿といってもいいレベルだが一泊五十エダからというまあまあの金額だ。

「大丈夫かよ」睦雄が不安げに宿を見る。

「でもそれなりに安いじゃん。睦雄、お金は三人で千エダちよつとしかないんだから」燐が言った。

「仕方ないよな」

三人は中に入った。中は陰鬱で、黄色いローブを着たカルム人が頭を下げた。

「いらつしゃいませ。一泊ですか？」

「そうです」英が答える。

「部屋は二つと一つで？」

「そうです」英は少し遅れて答えた。女の燐と別部屋にするという配慮を全く考えていなかった。

「二人部屋が八十エダ。一部屋で五十エダですね。前払いをお願いします」

英は王に貰った様々なものを売却すれば幾らになるだろうと考えながら金を払った。後で質屋のようなものも探さなくてはなるまい。部屋に案内される。

「別に一緒の部屋でもよかったのに」燐が言う。

「野宿は一緒だったしな」睦雄が言う。

燐と一旦別れ、英達が案内された部屋は質素なものだった。狭く、

かび臭かった。ろくに手入れもしていないのではないかと思うくらいだった。

二人は上等とはかけ離れたソファアに腰を下ろした。部屋を分けてよかった。三人だと布団をほとんど密着させないと寝られないだろう。

「これで八十は割に合わないんじゃないかって気がするけど」

睦雄は不満げだ。

「いいじゃん別に。寝れば。俺達ってここに何しにきてるんだよ。快適な宿で寝泊まりするためじゃないんだ。家に帰るって目的があるんだからさ」

英の言葉に、睦雄は神妙な顔つきになった。

「家に帰るか……」

「一応、そういう目的だろ」

「まあな」

それから二人は沈黙した。英は退屈なので鞆からガイドブックを取り出して適当に頁を開いて暇を潰すことにした。が、目的もないとどの頁も特に意味をもたないような気がして、大して面白くなかった。

「燐の部屋にでも行ってみよう」英は立ち上がる。

「そうだな」睦雄も同意した。

二人は燐の部屋の前に行き、扉をノックした。

燐が現れた。カルム人と同じような白いローブを着ている。

「二人とも部屋にあったでしょ、着なよ。これ、灼熱を全く気にしない耐熱効果があるんだって。しかも防寒効果も高いの。すごいよね。三着買つてこよう」

燐の部屋は英達の二人部屋より若干狭いが、一人部屋なら十分な広さだった。

「——ここでゆっくりしてるか？ それとも買い物を済ませるか？」

「あたしちよつと魔術の本で研究したい箇所があるんだ。だから買い物は後で自分で行くよ」

というわけで英と睦雄の二人は部屋にあったローブに着替え、外に出た。ローブを深く被れば一見彼らもカルム人に見えなくもなかった。

奇妙な魔術を扱うことができるカルム人。このローブもその魔術の結晶なのだろうか。

「あ、今俺達が着ているローブに耐熱効果はないって。これは単なる白いローブだよ」英が本を見ながら言う。

「だと思っただぜ。そんな効果があるのがあんな安宿に用意されてるとは思えないもんな。じゃあさ、その効果のあるローブを買っておくか」

服屋に向かう。服屋は白いローブが多いが、赤や黄、紺色もある。実はうっすらと色が違っていたり下半分だけ色が若干違っていたり、防水効果があるものや軽量化を図っているものなどかなりの種類があった。

「俺はこの水玉模様のやつがいい」

睦雄が選んだのは白いローブに水玉模様があまり派手にならない程度についているものだ。値段は六百エダ。

「まあ……先に物売ろう」

質屋で宝石類を売り飛ばす。睦雄が取っておきたいという宝石を除いても一万七千二百六十エダになった。

「当分大丈夫そうだ」睦雄が目を輝かせる。

「次の宿はもう少し豪勢になるかもな」英は言った。

彼らは早速ローブを二着買い、そして気になるものを物色し、よさそうだと思うと買った。怪物を寄せ付けないトライアングル、砂漠歩き用の靴。透明になれるローブ。結界石と携帯用キャンプ用具。腹持ちがよく栄養もある携帯食料と、水。遠く離れた相手とコンタクトが取れるという水晶の首飾りは、二万八千エダ。英も睦雄も欲

しがったが全く手が出ない金額だった。彼らはそれでも安く使えそうなものを探し、満足すると宿に戻った。残金は六千エダになっていた。

宿に戻り、隣の部屋をノックしたが、出なかった。

「寝てるか買物だろ」睦雄が言った。「俺達も今のうちにガイドブックで戦いのことを研究した方が良くもな。この旅、戦いがつきものだから」

英は頷いた。

「武器は買わなくてよかった？」

「俺もお前もいい剣と槍を持つてる。いい護身具だってあるんだし、他に必要性を感じないね」

というわけで英達は部屋に籠もって黙々と戦いの研究を始めた。

英は剣の試しをしようと思った。姫から貰い、王達から怒りをつた剣。その価値があるのかどうか、早速試してみることにする。

剣は今柄のみの状態だ。英は姫の言葉を思い出す。自分が望み通りの大きさに刃の長さは変化する。英は長くなれと望んだ。

途端に剣は長く伸びた。普通の剣と同じくらいの長さだ。

「へえ」

睦雄が面白がって見る。

今度は短くなれと望む。剣はいきなり短刀に早変わりした。

「すっげえ」

英は感嘆の声を上げた。お次はかなり長くなれと望んだ。途端に剣は天井すれすれまで伸びた。

「これすっげえ。かつこよすぎ」

英は有頂天だった。これがあればどんな難敵とも戦えそうな気がする。

「切れ味も後で調べとけよ。英もスキル持てよ。剣のスキル〇から一にすれば戦いも楽になるんじゃない」

「でも俺無能力者っていうことみたいだし」

「大丈夫。経験値が貯まっていればスキルも色々増やすことができる

んだって」

「そうなんだ。よく知ってるね」

「今調べた」

「やり方は？」

「ディスプレイ画面のスキルの項目を開いてな……」

睦雄に教えられ、英は剣のスキルを○から一にした。経験値は六千二十貯まっており、スキルを一つあげるのに千が消費された。もう一段階上げてもいいが、肉体強化のレベルも欲しかった。必要経験値は二千。悩んだ末、肉体強化レベルを上げ、残りは三千二十となった。幸運のスキルは最初から三もある。次に上げるのに必要なスキルは本来なら一万だが、半分の五千で済むようだ。ラッキースターの能力者の取り柄だ。だが三もあるならこれ以上上げる必要性を感じないし、そもそも必要経験値が全く足りない。英は剣のスキルをもう一つ底上げた。スキル二。必要経験値は三千。これで残り経験値は二十だ。しばらく能力上げはできないかもしれない。「どうだ、なんか変わったか感じるか？」

英は試してみた。剣を中程度の長さにして振り回す。全然違う。剣なんて素振りもろくにすることがないのに、まるで何日もトレーニングしたかのように剣を自由自在に振り回せた。まるで自分の体の一部になったようだ。

「すごいや。二まで上げてよかった」英は興奮のあまり笑い声を上げた。「達人になった気分だ」

「よかったじゃん」

「睦雄は何のスキル上げたんだ？」

「俺の経験値は一万八千九百まで上がったから、まず槍のスキルを上げて四にした。一万のところを五千で済んだ。だからもう一つ上げた。二万だけど一万。だから槍のスキルは五。あとは防衛術スキルを一つだけ。これも四千のところを二千で、他に千使って早足を○から一にしていた。走らなくてもなんかわかる。自分が早く走れるようになったって、体で感じる」

「ふうん」英は睦雄がどうしてそんなに経験値が多いのだと不公平に思ったが、考えてみれば今まで敵と直接戦った回数は睦雄のほうが遙かに多いのだ。大蛇の戦いの時も睦雄が一番蛇を傷つけていた。「幸運は上げないの？」

「お前と一緒にいれば俺もおこぼれに預かれるかもって思ってた」

「それは安易だ。俺が死ぬところを運良くお前が犠牲になって助かるってパターンだってあるかもしれない」

「いいさ。戦いなら強ければ勝つんだ。俺は後悔してないよ」

実際、睦雄は先ほどまでとは違い、なんとなく逞しい雰囲気に見えた。ディスプレイをいじるだけでここまで変化できるんだ。なんという世界だろうと英は思う。

ノックがした。開けると、燐だった。燐は先ほどのローブではなく、薄いピンク色のローブを着ている。燃える炎の絵が描かれている。「どうこれ？ 高かったけど宝石売ったらお金いっぱい。二千八百エダもしたけど結構いいでしょ」

燐はその衣装が気に入っているのか、随分はしゃいでいる様子だった。

英は彼女はよく今の格好がよく似合っていると思った。普段着のほうがいいが、この格好もカルム人っぽい神秘的な雰囲気が出されていて、燐の持つ本来の魅力を引き出しているように見える。

睦雄を見ると彼は明らかに見とれていた。英は見なかったことにする。

「で、買い物はもう済んだってことだね？」英が聞いた。

「うん、ばっちり。いつでも砂漠歩けるよ」

「まあ今日はもう夕方だし、今から風呂にでも入って、食事を取ってゆっくり寝て、明日に備えよう」

異論を唱えるものはいなく、再び部屋に戻ると一時間ばかりガイブックを見て、それから風呂に入った。風呂は狭く、丸い桶の中に湯が張られた簡素なものだった。英と睦雄が入るだけで限界で、二人は少し居心地が悪いながらも暖まり、久方ぶりにゆったりとし

た気分を味わった。

「カルムの町も悪くないな」睦雄が呟いた。

隣があちら側で風呂に入っているのだろうかと思は木の板壁を見て思った。その向こう側には誰かが風呂に入っている音が聞こえる。

よそう。友人の好きな相手のことを考えるのはあまり面白くない。

二人は風呂に上がると食堂で食事を取ったが、三人が思ったのはここが日本だったら、ということだった。食事は彼らが見たこともないような奇妙な形と奇妙な味をしていて、彼らは今日初めてカルム料理を食べ、そして見限った。

次の日、彼らは朝一で出立し、ハロー砂漠へと足を踏み入れた。

英はハロー砂漠については予め知識を得ていたが、懸念は砂漠に現れるという、大蠍さてりと、通常の駱駝の倍はあるという巨大駱駝だ。その駱駝は雑食で、人も襲って食べるようだ。

町で買ったブーツは砂漠の上だというのに靴跡がつかず、そして足も蒸れないという特殊なものだった。一足八百エダもしたが、その価値はありそうだ。

砂漠の空は雲一つ無い灼熱の炎天下だったが、ロープは五十度に達するかという熱にも強く、彼らは熱さとをさほど気にせずに歩くことができた。

英は落ち着かなかった。なにしろ砂漠なんて初めてだ。鳥取砂丘とは全然違うだろう。鳥取砂丘も行ったことはなかったが、きつと危険だ。油断していると底なしの流砂に足を踏み入れかねないかもしれない……。

だが今のところ安全だった。見渡す限り砂地で、オアシスと呼べるものはなさそうだったが、怪物の気配もなかった。順調に旅を進めることができた。砂漠横断は単純に東から西へ行くだけなら五十キロ程度だ。障害などないだろうし、一日で砂漠横断もできてしまいうだろう。

英はだんだんと冷静になっていった。毒蛇がいそうな気配もない。きつとここは比較的安全な砂漠なんだ。

空からの来訪者の気配に、いち早く気付いたのは隣だった。彼女の動作で睦雄と英も上を見た。

ワイバーンという存在がいるとすれば、それに似ている化け物が英達の頭上を飛んでいた。緑色で、大きな口。大きなプテラノドンのような羽は伸ばして長さが六メートルほどはありそうだった。

ワイバーンは英達を狙っているようだった。

「燐！」英が叫ぶ。

燐はワイバーンを燃やそうとしたが、炎はワイバーンには届かず、ワイバーンは危険を察するとさらに上に逃げた。

「英、弓使え」睦雄が言った。

英は昨日買った弓を取り出した。二百六十エダの、軽い割に飛距離が伸びるという弓だ。だが英は自信がなかった。弓が優秀でも英の弓のスキルは1。大型の怪物とはいえ飛び回る相手に当たるとは思えない。

それでも英は狙い、撃った。案の定外れた。

睦雄が槍を投げた。破裂の槍は軽く、手槍としても優秀なのだ。しかし惜しくも外れ、睦雄は落ちてきた槍を片手で楽々と受け取った。英は口笛を吹いた。

ワイバーンが滑空し、燐を狙った。燐は炎を使って撃退した。ワイバーンは火の攻撃をなんとか躲すと再び上に逃げ、再び周回して攻撃の隙をうかがう。

睦雄が槍を構える。燐も術の詠唱に入る。彼女が詠唱し始めるということは完全に本気だということで、英は火に巻き込まれないことを願った。英はというと、再び弓を構えて放ったが、また外れた。再び降下。巨大な翼が高速で降りてくるのは相当な迫力で、英は化け物に圧倒されて何もできなかった。

睦雄の破裂の槍がきらめき、ワイバーンの腹を貫いた。ワイバーンはそのまま砂漠に落ち、動かなくなった。

「空からは卑怯だろ」睦雄はそう呟いて怪物の体から槍を抜き取った。

助かったという気持ちと、睦雄に活躍を取られて悔しがる思い。くだらないと英は思う。命さえあれば後でいくらでも活躍できる。そういえば剣のことをすっかり忘れていた。この砂漠で他に怪物と戦うことがあれば姫から授かったこの奇妙で使えそうな剣を試すことができる。

大蠍が現れたのはそれから一時間後だった。怪物を倒して多少休

憩を取り、軽く食事と水分補給をして先を進み、それから小さな泉を発見したときだった。丘の向こうから、突如大型の蠍が姿を現した。

「アルゴス探検隊じゃないんだぞ」英は思わずそういった。

大蠍は大きかった。先ほどのワイバーンよりは小さいが、小型犬よりも大きく、おそらく中型の柴犬くらいはある。それが三匹もいる。

炎の攻撃が彼らを一気に攻めるが、砂漠での炎は上手く扱えないようだ。三匹には届かずに燐が神妙な顔をする。

「任してくれよ」英は内心不安ながらも剣を伸ばし、大蠍たちの前に立った。蠍はまっすぐ動かず、左右にたまに動いたりと独特の動きで英と距離を詰めていく。英は射程距離だと判断すると剣を振った。スキル二の英は蠍の一匹に攻撃を当てることができた。蠍が真つ二つになり、動かなくなる。

二匹の蠍に距離を詰められ、英は慌てて後退した。

一匹は睦雄の投げた槍が上手く刺さり、死んだ。もう一匹は逃げたのか元々戦意がなかったのか、どこかへいなくなってしまった。

「でっけえ蠍だな」睦雄が蠍の死体から槍を抜いてまじまじと見る。「毒あるかもしれないから食べれないからね」燐が言う。

「誰も食べねえよ。この蠍ちょっと怖いな。英、警戒したほうがいいと思う。あれ使おう」

「わかったよ」英はにやりとした。

「あれって？」燐が尋ねる。

「魔物避けだ」睦雄が答えた。

英は鞆からトライアングルを取り出した。そして、金属棒で打ち鳴らした。小さい割にかなり大きな音が砂漠中に響いた。

「説明通りならこれでいいはずだけど」英はトライアングルを鞆に戻した。

「これで魔物は寄ってこないって寸法なわけだ」睦雄が言う。

「ならもつと早くに使えばいいのに」燐が言った。

「一回使うと六時間後まで使えないんだ。それにどんな怪物にも通用するものじゃないみたいだし」

しばらく蠍を警戒しながら進んだが蠍は現れなかった。一応効果はあるのだろうと英は安心した。三千九百エダもして全く効果が無いのでは金の無駄だ。

泉の水を飲む必要はなかった。水は充分にあるし、補充する必要もないだろうと判断した。そのまま進む。途中蠍の姿が見えたが、近付いてこなかった。もっとも、彼らも人間を食料とするわけではない。テリトリーに近付かなければ安全な相手だ。

遠くでは現実世界では絶対に見られないような長い蛇が這いつつていた。その光景は実に不気味だったが、こちらにくるわけではないので薄気味悪い光景だったが、気にしないことにした。

風が強くなり、砂埃が舞い始めた。ロープは顔を覆っているためあまり被害はないが、それでも多少は目に入ったりし、鬱陶しいものだった。

やがて、昼になった。英達は砂漠の真ん中で休憩し、砂埃と戦いながら食事を取った。

「なあ、何時頃まで歩くんだ？」

睦雄の顔は明らかに砂漠越えに飽きたという様子だ。

「夕方までは。それからキャンプにしよう」英は言った。二人の顔つきを見る限り、真夜中まで歩こうといえば猛反対されるだろう。

英だって、最初是一日で砂漠を踏破できればいいな、などと思っていたが、少し体力がきつそうだ。

休憩を充分に取ると三人は再び歩き出した。英はときたま二人の様子を見ることにした。少しでも異常を感じたら再び休むことしよう。

二匹目のワイバーンの襲来は、燐の火？によってあっさりと終了した。しかし炎を使ったことによって燐の体力が明らかに奪い取られたのは確かだ。

「この鳥を手なずけることができれば砂漠なんてひとつ飛びだな」

睦雄が言った。

「鳥じゃないよ」英が訂正する。

「どっちでもいいよ」

トライアングルの効果が切れたのか、魔物が周囲に徘徊しはじめた。大蠍が五、六匹移動して近付いてくるし、小さい蛇がうようよと這いずりまわっている。

再びトライアングルを鳴らすと、蛇や蠍は近付かなくなった。

「便利だなあ」鳴らした英は感嘆の声を上げた。

「だけどこれじゃ経験値稼げないぜ、英」

「まあ、どっかで調整するよ」

睦雄の言うことももっともだ。全ての魔物を無視していればきつと後で苦勞する。一般的なファンタジーゲームならそうなるはず。大きな鳴き声がした。遠くでなにやら像のような大型の怪物が歩いている。

「あれ、駱駝に見えるかな？」英が言う。

「少なくとも駱駝よりもずっと大きいね」燐が言う。

「でもまあ、姿は駱駝かなあ」睦雄が言った。

なるべくその姿から遠ざかる。英は再びハロー砂漠の生息動物を調べた。巨大駱駝は体高六メートルに達する巨大な駱駝だ。おまけに足は砂漠の動物の中でもっとも早いらしい。魔法抵抗もあり、炎の効き目がイマイチ。

——相当厄介な相手のようだ。見つからないことを祈るしかない。「ばれたっばいぜ」睦雄が言った。

大型の動物は三人のほうへ近付いてきているようだ。ものすごい速度で。

英は舌打ちした。なんとかしないと。トライアングルの効果が効けばいいのだが、たぶん無理だろう。

英は弓を構えた。

「燐、炎の効きはイマイチだって！」

「でもあたしにはそれしかないしね」燐が術の詠唱に入った。

睦雄が破裂の槍を投げる態勢に入った。

「大丈夫か？ 一発で仕留められないなら、やめたほうがいいと思うけど」英は言う。

睦雄は迷っているようだった。彼が迷っている間に巨大駱駝は彼らの目の前までできていた。それは駱駝の姿だが、その大きさは化け物でしかなかった。

英は矢を放ち、矢は駱駝の胴に当たったが駱駝は微動だにしない。英はこうなるだろうと思っていた。

次は剣を取り出し、長く伸ばすと横に振った。しかし駱駝の太い首を刎ねることができず、首の手前で剣は止まった。

燐の火？が駱駝を襲った。巨大な駱駝を包み込むような大規模の火？だったが、駱駝は障壁のようなものを発動させたようだ。炎がみるみるうちに消えていき、駱駝自身に炎を浴びた様子はない。

「弱らせれば届くよ」燐が言う。

「俺に任せろ」

睦雄が飛んだ。凄まじい跳躍力で、英は睦雄はすでに人間じゃないなと思った。彼は駱駝の背に飛び乗ると大蛇のときのように破裂の槍を突き刺した。

駱駝は暴れ、睦雄は振り落とされた。

英は再び剣を振るう。横での攻撃が効かないのなら、突き刺すしかない。英は駱駝の腹部分に剣を突き刺した。深く、というわけにはいかないようだ。途中で止まってしまいが、かなりの痛みはあるだろう。

燐が詠唱を終え、再び、今度はさっきよりも巨大な特大炎を発生させ駱駝を包んだ。駱駝は悲鳴を上げて逃げていった。

睦雄が破裂の槍を投げたが当たらなかった。

「逃げちまったよ」睦雄は槍を取りに行った。

「まあいいじゃん。もう襲ってこないでしょ」燐が言う。

英は少し残念に思いつつ剣を戻した。伸縮自在に優れた武器だが、威力にに難があるようだ。破裂の槍のように危険な威力があるわけ

ではない。中途半端な切れ味だ。剣のスキルを上げれば、剣の威力もまた上がってくるのかもしれない。なんといっても睦雄の槍のスキルは五もあるのだ。

剣のスキルはあとでまた上げるとして、再び歩く。とにかく歩く。ひたすら歩く。やがて、星が瞬き始めるころには三人は歩くのを止め、結界石の効果を発動させると結界の中で携帯テントを開いた。テントは折りたたみ傘のような筒に入っていて、取り出すと勝手に大きくなり、最初から張られた状態になり、三人は驚き呆れた。とりあえず中に入り中の異様な広さに再び驚く。

「高いだけあつたて思うよ」睦雄は据え付けのソファーに腰掛けて楽々している。思いの外快適な空間で、単に寝るだけ意外にも色々な楽しみかたができるようだ。

「ああ、高いだけあつた」英もソファーに横になってくつろいだ。ソファーの向こうには燐も足をこちらに向けて横になっている。相当疲れている様子だが、テントの快適さが気持ちよさそうにも見える。三人とも町で手に入れた酒を飲んだ。リングのように甘く、そして以外にも度数が高いようで酒に不慣れな三人はすぐに酔っ払った。

「今日は疲れたし、魔法もいっぱい使った。明日の昼頃までここでゆっくりしようよ」

「結界石は十二時間しか持たない。ベストクリアの時間を考えるなら、早朝には発った方が良いと思うな」

「つまんないの」

燐は英の足を足で蹴った。英もやり返す。二人とも旅の疲れを癒すようにくだらないことで笑いあう。睦雄は睦雄でガイドブックの画面をゆったりと操作している。経験値の割り当てをしているのだ。燐が蹴るのをやめて英のほうに顔を向け、英の膝元に顔を寄せた。英はどぎまぎしつつも、これは単なる仲間としての気の許し合いなのだと言切る。

「ねえ英は学校ではどんな人だったの？」

過去形を言われるとどこか切ない気分になる。

「普通だよ。学校では俺は標準的な奴だったんじゃないかな。俺はなんでもそこそこできるんだ。だけど、そこそこのことは何もなかった」

今思えば、人より何か抜きんでたところが思いつかない。絵は上手かった。美術の教師に褒められた。ゴッホの星月夜を真似て自分なりのアレンジを加えた作品を、いい雰囲気だと高評価された。嬉しかったし、自分は絵の才能があるのかもしれないと思って、将来的なことを考えて興奮したことがあった。中学のことだった。高校になって絵画のことなんて綺麗さっぱり忘れていた。所詮、それまでのものなのだろう。

「じゃあ睦雄は？」

「睦雄は落ちこぼれだったね。馬鹿みたいに喧嘩っばいから俺が止めないとすぐに誰か殴ろうとするんだ」

燐が笑った。

「睦雄、そうなの？」

「俺は紳士だぜ？ 喧嘩なんてこれまでやったことないよ」睦雄はガイドブックを見ながらのままそう答えた。

燐が笑う。「そうなんだ」

英はなんだか妙に不安定な気持ちになった。理由はわからないが、何故か気分が落ち着かない。

睦雄が一瞬、こちらを見た。一瞬、ちらつと。その目つきが何やら英には不快に移った。理由はわからない。

「燐はどんな感じだった？」

「あたしも普通だよ！ どこにでもいる、普通の女子だよ」

そんなことはないだろうと英は思う。燐は美人だし、さぞや男子にちやほやされたのではないだろうか。

「それで、二人はどうしてここにきたの？」今度は燐からの質問だった。

「どうしてって……」英は困って睦雄を見た。「どうしてだっけ、

睦雄」

「お前が馬鹿だからだろ」睦雄はそっけなく答えた。

「なんだよそれ。でもどうして俺達がここにきたのかはわからないんだ」

「つまり……偶然ここにきちちゃったってこと？ この世界のことを何もしらずに」

「そう。燐もそうじゃないの？」

燐は首を振る。「違うよ。燐は自分の意志でここにきたんだから英は思わず体を起こし、自分の足下に横になる燐を見下ろした。

「待った。燐はどうやってこの世界のことを知ったんだよ？」

「この世界は知ってる人には有名な世界なんだ。だから色々調べた。ここはね、願いを叶えてくれる世界。この世界に何らかの効果があるのか、クリア後の報酬なのか、それはいまいちわからなかったけど、願い事は確実に叶うんだよ」

英はふうんと言った。

「お前の叶えたい願いつて何だよ？」
聞いたのは睦雄だ。

燐が上体を起こした。燐の目は不気味な輝きに満ちていた。英はその様子に、燐の目の奥にある何かを感じ取った。

「魔法使いになればいいなって」

「はあ？」

「世界をね、あたしだけの世界をひとつ。そこであたしは魔法使いとして旅立つの。すっごい強い魔法使い」

「よくわからん。それって今も似たようなもんじゃないの？」

燐はくすりとする。「確かに。だけど決定的に違う。ここでは私は魔法使い。だけど、自分の世界じゃない。これはあくまでも呪われたゲームの世界だからね」

英と睦雄は顔を見合わせた。

「まあいいよ。叶えればいいじゃん」

英は疲れてきたので素っ気なくそう答えた。酒が回る。燐が妙な

ことを言うのも酒が回っているからだろ。眠くなってくる。

「俺、そろそろ寝るよ」

時刻はいつの間にか夜の九時になっていた。

「英」

眠りに入ろうとする前に、睦雄が英を呼びかけた。

「何」

「メントウスの神の誘いによって、よりよき眠りを。健やかに」

「ああ……メントウスの神の以下略」

神の恩恵か、英は気持ちよく眠れた。

翌朝、英が起きるとすでに睦雄が起きていた。燐が気持ちよく眠っていた。

「おはよう」睦雄はまだゲームブックを読んでいる。英は睦雄は本嫌いと思っていたが、もしかしたらそんなことはないのかもしれないと友人に対する思い込みを改めた。

たわいもない会話をしているともそもそと燐が起き出した。

「おはよう」

寝起きの燐の顔は普段の天然的な装いよりもさらに隙だらけで、英はそんな彼女に思わず見とれた。いけないいけない。こんなところにいる女が一人。変なことは考えない方がいい。

「おはよう独裁者」

「なんで……ああ、お酒飲んだんだけ。忘れて良いよ。でも二人ともクリア後の願い事くらいは考えとけば？ 死ぬか、叶うかなんだから」

朝食を簡単に済ます。結界石の効果をなくし、キャンプを折りたたむ。キャンプは折りたたもうとすると嘘のように縮小し、筒の中に戻すことが容易にできた。

まだ早朝で砂漠は寒かった。フードがなければ耐えられないほどの極寒だ。

再び三人は歩き出した。地図を見る限り、大体あと十五キロほど

歩けば砂漠を抜け出せるはずだった。

その前に現れたのは普通の大きさの駱駝に乗った大柄なフードを被った男だった。

「その者たち、これからどこへ？」

英はこの男が強制的なイベントキャラなのかどうかを疑った。

「僕達はゴルコナへ」英は言う。

「気をつけていきたまえよ！」

男は去っていく。

「あの男、何か落としてたぞ」

睦雄が銀色に光る物体を拾った。それは水晶球のネックレスだった。

「確認してみよう」英がガイドブックを調べる。見つけた。水晶の首飾り。身につけていると魔法の耐性がつく。暗闇で光り、松明代わりになる。説明にはそう書かれていた。

二人に説明すると睦雄はそれを首にかけた。

「俺って魔法耐性ないからな」

睦雄は冷めた目でそういった。

「きつとあの男、また後で出てくるぞ」

英は苦笑いを浮かべる。「かもな」

四時間ほど歩き、三人は無事に砂漠を越えることができた。

砂漠を越えた後はなだらかな斜面が広がる草原が待っていた。今まで砂ばかりだったのに境目を越えるとすぐに緑色の地が広がっているのに英は不気味さを覚えた。

それでも草原はのどかで気温も涼しげだった。三人はフードを捨てて袋に入れた。

「もう使わないだろうけどな」睦雄が言う。

そうかなと英は思う。カムの町はまだまだありそうだ。

休憩し、食事を取る。ついついいたた寝してしまい、結局昼を過ぎてからの出立になった。草原を過ぎると森になったが、レンガで舗装された道があるのでそこを進んでいく。舗装された道は障害もないが左右の密林は今にも何か恐ろしい獣が飛び出してきそうな雰囲気秘めている。

英は不安になってトライアングルを鳴らした。気休めだが、少しは効果があったかもしれない。明らかに普通の鳥とは違う大型の鳥が大きな羽音を立てて飛んで行った。この世界には死体になるまえにしばみ始めるような鳥もいるらしい。

森を越えると大きな山が立ちはだかり、道は山にぽっかり開いた大きなトンネルへと通じていた。

「そのまま進むしかないのかね」睦雄が言う。

英は調べる。ここは常闇の洞窟というところらしく、化け物の巣窟のようだ。

気が進まない。だが西へ行くには最短のコースではある。ルート通りに行くのなら、ここは避けては通れない。迂回するルートもあるが、鬱蒼とした森には大型の獣が徘徊しているし、危険なようだ。「行こう。距離は直線で八キロ弱。だけど迷路みたいに入り組んでいる。出るのは難しいって」

「じゃあ戻るのか？」

「森も危なそうだよな」

「行こう。トンネルの中には休憩所も売店もあるらしいし、なんとかなるだろ。このための水晶玉の首飾りなんだろうしね」英は睦雄の首元を指さした。

かくして三人は常闇の洞窟へと足を踏み入れた。

昼なお暗い洞窟の内部はひんやりとしていた。蝙蝠の歓迎がありそうだと英は警戒した。

水晶玉がぼんやりと光り、洞窟内を照らした。洞窟は進むうちにだんだんと狭まっていき、やがて一人一人がやっと通れるほどの幅になった。縦一列に並んで何度か通ると開けた場所に出たが、その先は通路が三つに枝分かれしていた。どちらに進んで良いのかわからない。

英はガイドブックを開くが、ダンジョンという分類になる場所は自分達を通った場所しか表示されず、自分で作成しなくてはならない。地図はほとんど真っ黒だった。本を閉じる。

「真ん中に行こう」

英が適当に決めたが他の二人は意見することもなくそのまま中央を進んだ。中央の道は広く、アーチ型になっている。蛇行する道を進んでいくと前方が妙に明るかった。明かりに近付くと、それは炎を身に纏った犬だった。一見犬が焼かれているようにも見えるが、犬は燃えさかる炎を常に体外へと放出しているようだった。

英は躊躇する。こんな化け物と戦って、命があるものなのだろうか。

しかし犬は動かない。それに、どうも敵意を感じない。

「ここを通りたければ我が質問に答えろ」

嘘のような話だが、犬が喋った。低いがはっきりとした口調だった。

「犬が喋ったぜ」睦雄が呟く。

「この中の一人が焼き殺されるとしよう。それは誰？」

「お前だよ」睦雄が真っ先に答える。

犬は何もいわずに襲いかかってきたが、睦雄は予期していたかのように破裂の槍で突き刺した。炎の犬はあっさりと死んだ。

しかし犬は生きていた。道を進むと再び炎の犬が立ちふさがった。何事もなかったかのように。

「私は再生の火を宿す。炎を消すことができねば殺すことは叶わん。問おう。この中の一人が焼き殺されるとする。それは誰？」

「だからお前だよ」

槍を投げようとする睦雄に英が止める。

「無駄だって。慎重に問いに答えようよ」

「こんなの意味不明じゃんかよ」

「たぶん、つまらない答えがあるんだって。考えてみるよ」

しかし考えれば考えるほど答えなどあるようには思えず、むしろ睦雄の答えが一番もつともな気がしてきた。英は悩んだ。

「俺だ」英は試しにそう答えてみた。

犬が紅蓮の炎を英にぶつけてきた。英は全く対応できずに、炎を直接浴びた。

睦雄と燐が叫ぶ。

炎は消えた。しかし英は全く無事だった。

「どういうことだよ？」睦雄が安堵の顔を浮かべながらも不思議がる。

「きつとこれだよ」

英は自分自身戸惑いつつも姫から貰った首飾りを持ち上げて見せた。首飾りは強い輝きを放っている。

「それ、バルモンの首飾りだ。うわあ。レアみたいだよ。姫から貰えるイベントってなかなか発動しないらしいんだから」燐が羨ましそくに首飾りを眺める。「一日一回、致命傷になる攻撃から身を守ってくれるんだよね。すごいアイテムだよ！」

英は首飾りをまじまじと見つめた。そんなにすごい効果のあるものだったとは。剣をくれたりと、ひょっとして姫は自分に好意を寄せてくれていたのではと、英は嬉しくなる。

「問いに答えよ。この中で誰からが焼け死ぬとしたら、誰？」

「あたしかな」 燐が答えた。

燐は紅蓮の炎に焼かれた。しかし彼女は全く平気のようだった。火に焼かれたはずの彼女はどこか焦げた形跡すらなかった。

「問うぞ。この中で誰かが焼け死ぬとしたら、それは誰？」

「それはお前でしょ」

女の声が出た。と、強烈な風が吹き、犬は炎と共に消えた。

英は背後を見る。女の声は背後からした。暗闇の中から、白いワンピースを着た女の姿が現れた。黒髪の、あどけない顔立ちの美少女の姿。

「今のは魔法かよ？」 睦雄が聞く。

「そうだよ。犬の質問はアイツと答えればいいみたい」

「くだらない」 睦雄が呟く。

少女は背が低かった。しかし、先ほどの攻撃からして魔法使いであることは予想できた。

「君は一人なの？」 英が尋ねる。

「うん。あたしは錦遙香。風の魔法使い。いきなりなんだけど、あたしを仲間にしてくれないかな？」

洞窟内部は蛙のような顔をした半漁人が多く生息していて、地底湖の周辺に沢山いた。破裂の槍とバルモン家の剣を駆使し、さらに燐の炎を炸裂させて切り抜ける。

売店は開けたフロアにあった。結界があるために魔物は入ってこれないようだ。そこで一同は食料の補給をした。売店には他にも様々な客がいて、フロア全体が休憩所のようになっていて、ゆったりと休めた。ここは儲かるだろうなと英は思った。

休憩を取り、迷いながら地図を作成しつつ、その地図を見ながらなんとか正解の道へたどり着き、そして外に出た。外は昼だった。

日の光の中で英は新たな仲間を見た。遙香は勿論、現実世界からの来訪者で、風の魔法使い。今までずっと一人で戦ってきたようだが、蛇のイベントですでに蛇が退治されているのを知って、蛇を倒したメンバーを追っていたようだ。

「あのイベントを制覇できたなら強力なアイテムを持っているメンツだという可能性が高いと思ったの。協力するなら強い仲間のほうがいいし」

「一人で砂漠も越えたわけか。お前なんかがよく一人で戦ってこれたな。見たところちっちゃいし、ほんと偉いよ」睦雄が言う。

「魔法使いはこの世界では優遇されてるみたいだよ。その炎使いの人だつて凄そう。最初の選択で魔法使いになれるのはやっぱり得なんだよ」

「ソルジャーのほうがかつえよ。風なんてしょぼそうだし」

遙香は睦雄に冷たい視線を送った。

英は二人を見て不安になる。燐と睦雄はまあ、睦雄が好意を寄せているだけあつて上手くやっていたが、新しい仲間といきなりぎくしゃくするのは嫌だ。魔法使いという貴重で優秀な人材を失いたくない。まあ、おそらく睦雄は嫉妬しているだけなのだろうが。

町が見えてきた。英は確認する。コリエントールの町。別名、絶壁の町と呼ばれている。

町は小さく、民家が軒々としている長閑な場所だった。これでは村と呼んでもいいが、英の住んでいた場所にも村レベルの市があった。ここもそういうことなのだろう。そもそも村と町の明確な境とはなんなのだろう。

家々はどれも綺麗で新しい外観で、庭付きだった。庭には犬を飼われている。見たところ普通の犬だ。英は妙に新鮮な気分になった。「なんか俺達の住んでた所みたいだな」睦雄が言う。

「ほんとだね」燐が言う。

「作ったのが日本人だし、こんなところもあるんだろうね」遙香が言った。

「作ったって……この世界を作った人のこと？」英が尋ねる。

「そう。この魔法世界を構築した人は日本人なんだって」

「こんな世界人間が作れるかよ」睦雄が言う。

睦雄の言うとおりかもしれないと英は頷く。別の世界を作れるなんて完全に人智を越えた話だ。

「どうでもいいよ」燐が言った。「それよりも宿と食事、でしょ？」

ここで泊まっていく予定ではなかったが、それもありかなと英は町の雰囲気眺めて思う。地図を見る限り次の旅は森を越え、大河を船で進むという過酷そうなものだ。いつの間にか昼も越えているし、腹も空いてきた。

飯はすぐにあることができた。どこか見覚えのあるような看板があったので中に入ると、牛丼屋だった。四人は四エダという低価格の牛丼を食べた。現実世界での牛丼チェーン店より味はやや落ちるが、似たような味だったので四人は満足した。

「まあまあだったな」睦雄は満腹そうだ。彼はお代わりしたのだ。

民宿も見つけた。一人二十八エダで、カルムの町ユニボンの宿よりもずっと安い。中は民宿なので質素だが、部屋は二部屋とてゆつたりと落ち着けた。

英と睦雄は早速貯まった経験値をスキルに振り分けることにした。睦雄は肉体強化と槍とスピードにつき込み、英は剣のスキルを二つ上げ、運を一つあげ、そしてスピードを一つ。魔法耐性スキルを一つ。魔法耐性は甘くみてはいけないかもしれない。実際、洞窟内の犬の炎の攻撃を首飾りなしで浴びていたら火だるまで苦しみながらあの世行きになっていただろう。

なんだか本が読みたくなってきたので英は適当な本をガイドブックから見繕ってダウンロードした。どこで電波が届いているのかということを考えたが、そんな疑問はここでは無意味だ。何でも魔法で叶うことができるのだ。この魔法世界は、ある意味で理想郷なのかもしれない。

だが家に帰りたい。こんな非現実的世界の空気にいつまでも触れていたくない。頭がおかしくなってしまうそうだ。いや、すでに半分おかしくなっているのかもしれない。

「もしかして俺達もう死んでるのかな」英は言った。

「ありえるね」睦雄が言う。

「気が狂いそうだ」

「大丈夫だろ。お前は正常だし、俺も正常だ」

睦雄の言葉も大して慰めにならない。本を読むことにする。本は現実世界の本なので、英は元の世界の空気に触れている気がして慰められた。だが現代小説ではなく、随分古いもので読みづらかった。結論として普段あまり本を読まない英には退屈なものでしかなかった。

「町を散策しようよ。退屈なんだ」

「俺はちよっと調べ物。悪いけど一人で行ってきてくれないか」
「薄情者」

英は一人宿の外に出た。新しい仲間が燐と上手くやっているだろうか。二人とも美形だが、どうも新人は燐と比べて大らかなところがない。気が強いのはどちらもだが、遙香は尖っている。

町をふらついてみるが、これといって面白くない町だ。ただ、絶壁の町というのなら絶壁があるのだろうとが特に興味はない。この町を出るときにでも見れる機会はあるだろう。宿に戻り、庭で剣の練習をする。剣のスキルを二つあげて、今は五だ。最大三十とはいえ終盤の平均スキルが八といえ、もうかなりのレベルまで仕上がっているといえる。振る剣も、まるで唸りを上げるような音がする。伸ばして振るう。この剣のしなり具合はまるで鞭のようだ。活かした使いようがありそうな気もする。

いい感じだ。大抵の敵にはこの剣一本で勝てる気がする。英は一時間ほど剣を振るった。少し疲れてきた。空は夕暮れだ。そろそろ中に戻ろうと思ったとき、奇妙な気配に気付いた。

なんだろうなと英は周囲の気配を探る。なんだか妙な感じだ。

呼ぶ声がする。英はそう感じた。自分と呼んでいるような、そんな感覚。

ふらふらと、呼ばれた方向へと足を進めた。庭を出て、村の奥へ奥へと向かっていく。そして英は村の外れにある、深い峡谷まで来た。そこは絶壁になっており、目の前には大きな河が流れている。呼ぶ声は川の中から聞こえてくるのだろうか。英は魅入られたかのように絶壁の縁に立ち、それから一步足を踏み出そうとした。

間一髪、英はそこで正氣に戻った。慌てて数歩後ろに下がり、自分が何をやろうとしていたのか、あのまま進んだらと恐ろしくなる。呼ぶ声は何かの歌のようにも聞こえる。絶壁にきたものは英だけではないようだ。町人たちや旅人が、絶壁に近付き、落ちていく。落ちた者は途中で我に返ったのか、悲鳴を上げたがもう遅い。英は

近くを歩いている老人を止めようと前に立つたが、ものすごい力で払われ、どかされてしまった。

英はこの極めて異常な事態にどう対処すればいいのか考えた。特に何も思いつかない。一体この歌を歌っている者は何者なのだろうか。わからないが、この歌に引き寄せる呪術のようなものが込められているのは間違いない。

剣を抜く。そして落ちる前の町人の背中を峯で打った。町人は正気を取り戻したようで、周囲の状況を見て慌てて逃げていく。

いける。英は同じ方法を試して町人の飛び降り食い止めようとした。数人の飛び降りを回避させると、突然歌が止んだ。

川から大きな水の音が聞こえ、そして、英の目の前に浮遊する何かが現れた。

それはなんだかよくわからない、存在に見えた。何かを例に取るならそれは蟻だった。そしてそうして見ると蟻にしか見えないような怪物だった。蟻の胸には蠅のような透明な羽が生えていた。羽は本体の何倍も大きく、羽の存在で随分大きな存在に見えるが本体は英よりも一回り小さい程度だった。

「何者だ？　そうか、異邦人か。我の贄たちをどうして止めようとする。貴様達異邦人はここにいてはならん存在でしかない。我らにとって、貴様らは害悪の種でしかない」

怪物の声は憎悪に打ち震えていた。

言葉を発する化け物との対峙は初めてだと英は戦いになりそうな緊張の中、思った。

「人を襲うから俺達に邪魔されるんだ。俺にやられなくては町の者を襲うのをやめることだ」

意外にもまともな返答をしたなと英は思う。まるで正義の味方のような台詞だ。ここにきて、こんな恥ずかしい台詞が言えるようになったのだろうか。睦雄たちがいなくてよかった。いや、いたほうがいいのか。このままこの化け物相手に一人で勝てるのだろうか。

「くだらん！」

蟻に似た化け物が羽ばたき、英を襲おうとする。英は王家の剣を伸ばし、羽を切った。羽を切られた蟻は飛ぶことが難しくなったように、谷底に落ちていった。

英は意外にあっさり勝てたと思った。周りにいる町人たちは正気を取り戻したようだが呆然とした顔をしている。

「すぐに生け贄を……。すでに八人落ちた。あと二人を落とすのだ！　だがもう遅いかもな」

そう言葉を発したのは魔法使いとしか思えない格好をした太めの老婆だった。老婆は厚化粧をしていて、やたら長い爪を赤く塗っている。英はその老婆の外見から、あまり良い印象を抱かなかった。

「化け物は倒した！」英が老婆に向かって声を荒げた。

「何をいう異邦人め。貴様のおかげで谷底の化け物が目覚めるぞ。あれはただの使い魔でしかないわ！　谷底を見てみい！」

英は言われた通りに谷底を見た。なんと、絶壁から化け物たちが這い上がってきている。それは先ほどの蟻の姿ではなく、ヤゴのような化け物で、その数は五匹。一匹一匹が英の十倍ほどありそうな巨大な化け物だ。

「何だよあれ」英は後ずさる。

「この町を守る守り神だ。しかし三ヶ月に一度、先ほどの妖魔の歌を合図に生け贄を最低十人捧げぬと村を滅ぼす邪神に変わる。見ろ！　貴様のせいだぞ。彼らは荒ぶっておるわ。神々の怒りよ。もう贄を捧げても遅いだろうな。余計なことをした貴様はまっさきに神の鉄槌をくらうといいのだ」

老婆の言葉を無視し、ひとまず英は睦雄達を応援にきてもらうことにした。あの数相手に英一人では到底敵わない。睦雄の槍と燐の炎が絶対必要だ。

英が戻ろうとすると三人がちょうど崖のほうへとやってきているところだった。彼らは走っていた。まるでこっちの窮地を知っているかのように慌てていた。

「間に合ったか！」英の前までくると睦雄が荒い息をついだ。

「いや……俺のせいで、邪神が崖から這い上がってきているんだ」
「ってことは歌を歌う化け物を倒したってこと？ まあいいと思う。
それもセオリー通りだし」遙香が言った。

「黒幕はたぶんその婆さんみたいだけどね」燐が魔法使いの格好をした老婆を指さす。「あれも化け物みたい。水に落とせばその正体を現すんだって」

「ババアは後回し。さきにあっちだろ」

睦雄が指さす方向は絶壁で、すでに五体の化け物は崖を這い上がっていて、陸地にその巨体を降ろしていた。

英は喉を鳴らした。巨大すぎる。ハロー砂漠にいた駱駝よりも少し大きな化け物が五体。大してこちらは四人で大きさは比べものにならない。ヤゴをそのまま象並にした巨大さに、英は目眩を覚えた。

「……無理だな」睦雄が言った。

「ですね」遙香が応じる。

「逃げよう」燐が言った。

「え、それってセオリーなの？」

英の戸惑いの問いには誰も答えず、燐が炎を炸裂させ、それを合図に三人は脱兎のごとく駆け出し、英も慌てて後を追った。

それから四人は町を出た。

「それで、俺達はこれからどうすればいいんだろうな」 森の開けた場所で、英が言った。先ほどまでしゃべれる状態ではなかった。全速力で走ってきたからだ。

「迂回するしかないだろ。あの町のイベントはちょっと無理だろう。無理ゲーってやつ。たぶんイベントの選択をミスったんだと思うけど」

「俺のせいなのか？」 英は自分を指さす。

「そうだよ。あの蟻の化け物を殺さずに老婆のほうを殺せばよかったんだ」 隣が言った。「実はあの老婆が全てを支配していて、邪神——あのでっかい虫の化け物を操ってたの。だから、老婆を殺せば虫たちも生け贄を求めなくなって、イベントは終了する。老婆の正体は魔王の手下で、ザリガニみたいな化け物なんだよ。さっきのタイミングでザリガニを倒しても虫たちを止めるにはちょっと遅すぎるみたい」

英はなんだか狐に包まれたような気分だった。彼らはまるで未来からやってきて色々な展開を知っているみたいだ。

「詳しい詳細載ってたか？」

「遙香はこれ二週目なんだってよ」

睦雄の返事に英は遙香をまじまじと見た。

二週目？ つまり、このゲームを一度クリアしているということだろうか。

「あ、クリアはしてないよ。というか、最後までいったんだけど、条件が満たなくて最初に戻されたの」 そう言う遙香は少し恥ずかしそうだった。二週目をやっているというのが恥辱に感じているのだろうか。

「すごいな。じゃあ遙香はもう最終まで行けるレベルに達しているんだ」

「いや、スキルは最初の段階までじゃないけどかなり落とされたよ。それに二週目は新人の人たちとまた一緒にやっていかなきゃいけないし、色々ストレスだったかな」

だがこれは随分有利なのではないか。英は考えてみた。彼女はつまり、これから先の展開についてかなり詳しく知っているのだ。ならば、彼女の情報は随分有益なものになるはずだ――。

「ちよつと待てよ。二週目ならさっきの町の展開を覚えているだろ。もつと早く対処すればあんなことにはならなかったんじゃないか」

「歌のイベントはタイミングに時間差があるんだ。だからってわけじゃないんだけどね。白状するとすっかりこの町の展開を忘れてました！ ごめんなさい」

遙香は深々と頭を下げた。

「いや、過ぎたことだし……」英は口ごもる。「でも遙香が二週目なら今後色々頼りになると思う。色々アドバイスを頼むよ」

「任せといて」

完全に信頼はできないなと英は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1305x/>

魔法世界の

2011年10月29日14時09分発行